〔翻訳〕

ヘルマン・バウジンガー
市民社会の形成と労働者
――市民化をめぐる解釈類型の帰趨――
（1973）

Hermann Bausinger,
Verbürgerlichung. Folgen eines Interpretaments (1973).
Japanese Translation From German With a Commentary
by Shin KOHNO, Ex-professor of Aichi University

河 野　　眞（訳・解説）

Japanese Translation With a Commentary by KONO Shin

愛知大学元教授

Ex-Professor at Aichi University

E-mail: smmakono@yahoo.co.jp

Abstract:

This paper is the Japanese translation of an essay in German by Hermann Bausinger, a German Folklorist (1926–2021), that deals with the process of the Bourgeois transformation of German society through the nineteenth century, especially from the viewpoint of culture while giving consideration to labor, or the so-called working class. Bausinger called the theories of class conflict into question and discusses that neither “Bourgeoisie” nor “Proletariat” had constant applicable concepts, rather that both simply changed to the constituents of modern society although Bausinger thoroughly recognizes the significant rolls the class concept and labor movements played in German history. Moreover, Bausinger emphasizes that we should look for the concepts leading to the cultural situation in the nineteenth century, the era of major change, aside from a reasonable doubt of whether we really reached an “equalized living style” as citizens or may still be living in a “mass society” coexisting with “mass culture.” As a matter of fact, Bausinger already raised this concern about those concepts as early as the 1970s.

目次

０．はじめに
１．《第四身分》
２．労働者のクラブ・組合
３．市民化の標識の下で
４．民俗学の課題
［ディスカッション］
［訳注］
［訳者解説］

（原文には区切りはほどこされていないが、訳者の判断で区切りと小見出しを設けた）

はじめに

民俗学は、永らく労働者と労働者層を特別な価値をもつ対象とみなしてきた。要するに、触らぬ神に祟りなしとばかり祭り上げていたのである。実際、このテーマが論じ尽くされたとは誰も言えまい[1)]。あるいは、ちょっと意地悪く図式化するなら、こういう言いわけが当たっているかも知れない。世界精神が、緩慢ながらも着実に民俗学に追いついたのだ、と。してみれば、労働者を話題にしないのは怠慢どころか、むしろ目配りの効いたリアリズムなのだ。

> だって、労働者？　何を指してそう言うのだ。あのね、私はちょうどチロールでの休暇旅行から帰ったばかりなんだが、そこでは労働者が高級ホテルに泊まっているんだ。皆な自家用車をもっている。うちの近所にも労働者が暮らしているが、子供に高いおもちゃを買ってやっている。最近、新聞にも載ったことだが、ガストアルバイター（外国人出稼ぎ労働者）が —— 出稼ぎだよ！ —— それが半日出勤で一月3000マルク以上もらっているんだぜ。

こういう話は実際にはあやしいことが多いのだが、社会科学の諸理論は、往々、こういうアネクドートで縁取りされている。《平準化された中流社会》、《均一社会》、《豊かな社会》、《過剰社会》[2)]などの理論仮説はどれもそうである。これを言うのは、市民化というテーマ

1）研究の現状については次を参照，Gottfried KORFF, *Bemerkungen zur Arbeitsvolkskunde*. In: Tübinger Korrespondenzblatt Nr. 2, Jan. 1971, S. 3–8. ここではポイカート（Will-Erich PEUCKERT）とブレポール（Wilhelm BREPOHL）が先鞭をつけたことが特筆されている。

2）ここでは関聯する諸理論を個別に取り上げることはできないが、次の諸文献を挙げておきたい。Helmut SCHELSKY, *Wandlungen der deutschen Familie in der Gegenwart*. Stuttgart 1954.; Ferdinand ZWEIG, *The worker in an affuent society*. N.Y. 1961.; John Kenneth GALBRAITH, *Gesellschaft im Überfluß*. München-Zürich 1963.

のアクチュアルな背景は、そうした理論仮説に他ならないからである。とは言え、ここで問題にするのは、アクチュアルな社会像ではなく、そうした社会像の歴史的次元である。社会に関するこうした解釈にはそれはそれで歴史がある。それは、この種の単一の解釈可能性（むろん種々の変形を含みはするが）が多様な発展局面に適用されてきたという意味においてだけでない。解釈可能性と実際の解釈が非常に早くから解釈類型へと固定したこと、すなわち書割り的な（［訳注］紋切り型の）観念となったこと、さらにその書割り観念が発展に影響した（今もしている）との意味でもある。かくして市民化は、いわゆる*《自己充足的予言》[3]の問題圏に入って来る。ある種の観測、それも当の観測に（少なくとも部分的には）基づいて充足にされる（［訳注］現実化する）観測である。むろん、充足（［訳注］現実化）の度合いを過大に受けとめてはいけないことも明らかになるだろう。

《第四身分》

筆者は、*ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール（1823–97）から始めたい。むろん、ドイツ民俗学の展開にとってリールが中心的役割を果たしていなかったなら、またリールが民俗学のイヴェント・スピーチのネタになっていなければ、そこから始めはしないだろう。とは言え、リールというモニュメントを傷つけようとしているわけでもない。むしろ逆で、リールは、市民化をめぐる一聯のテーゼを最初に措定した一人だったからこそ、なのである。またそれにあたって筆者は、『ドイツ人の仕事』[4]や社会主義に関するリール後期の書き物[5]を無視するわけではないが、基本的には1851年の『市民社会』[6]に着目しようと思う。

この『市民社会』という著作の三分の一を占めるのは、「第四身分」である。そうした章立てだけを見て判断するなら、この書物は、驚くべき社会的開明性の証左となることだろう。しかしリールにとっては、諸身分は、自然な現存、《自然史的》と解された現存[7]、すなわち絶えず自己展開を遂げ自己の存在をみとめさせずにはおかない現存であった。それゆえ第四身分とは、すでに第四という数字の振り方からもネガティヴな性格付けである

3）Robert K. MERTON, *Die Eigendynamik gesellschaftlicher Voraussagen*. In: Logik der Sozialwissenschaften, hrsg. von Ernst TOPITSCH. Köln-Berlin 1965, S. 144–161.

4）Wilhelm Heinrich RIEHL, *Die deutsche Arbeit*. Stuttgart 1861.

5）特に注目したいものとしては次の論説を参照，Wilhelm Heinrich RIEHL, *Zur inneren Geschichte des Socialismus*. In: Historisches Taschenbuch. Begründet von Friedrich von RAUMER, hg. von W. H. RIEHL. 5. Folge, 10. Jg. Leipzig 1880, S. 265–315.

6）ここでは次の版を用いる。Wilhelm Heinrich RIEHL, *Die bürgerliche Gesellschaft*. Stuttgart 1866.

7）同上，S. 279.

ことが明らかで、要するに《身分なき身分》なのだった[8]。《在来の社会からの脱走兵や追剥に成り下がった者たち》[9]が旗を押し立てて集まっているのだった。操られる存在でもあり、その操(あやつ)り手は《精神労働のプロレタリア》[10]である。これらの目印を挙げつつ、リールは、その当時のドイツの論壇、と言うより（何度もそう名指されるように）ユダヤ人たちの論壇に対して敵意を露わに攻撃に打って出た。その時代の産業のあり方は、アイロニカルなレトリックをもちいた反問で片づけられた。要するに不公正が金切り声を立てているということじゃないのか、エスキモーだってあれほど恵まれない環境の中で生きているのに[11]。リールにとって第四身分が問題なのは、それが《倫理的冒瀆》[12]だからであった。《祖国無き者》[13]という罵言も浮上した。と言うことは、1885年にドイツ皇帝がわざわざこの語をひねり出す必要がなかったことになる。事実、リールは、1848年革命は《第四身分が身を以て示した祖国喪失のわざ》[14]と断じている。さらにこうも言う。《家と家族という恵み》[15]はこの身分の者からは抜け落ちている ―― が、労働者たちが《ねたみを捨て、没我に徹して、偏に仕事に徹するなら》[16]すべては一変するだろう。

もっともリールは、《賃労働者》を念頭に置いているわけではない、と再三断っている。賃労働者については、《この上なく名誉ある階級》[17]としてみとめることにやぶさかではなく、むしろ《新たな、真正の第四身分》[18]が生成するチャンスを秘めている、とまで言う。しかし（倫理的なものを除けば）それを特定する基準は無く、そのため糾弾は、実際には賃労働者にも向けられる。つまり、《労働者身分の自己改革》[19]が望まれると説きはするが、正にその文脈において賃労働者の過小評価へと突進する。労働者たちのクラブ・組合（フェルアイン／アソシエーション）は暗礁に乗り上げているではないか、否、もともと難破するべく定められているのだ、とリールは言う[20]。新たな《身分》の一貫性のある自己発見

8）同上，S. 280.
9）同上，S. 278.
10）同上，S. 312.
11）同上，S. 280f.
12）リールのこの表現は次の小文に認められる。Wilhelm Heinrich RIEHL, *Die Arbeiter. Eine Volksrede aus dem Jahre 1848*. なおこの小文はリールの『ドイツ人の仕事』（*Die deutsche Arbeit 1861*. 前掲注４）に収められた。また今日ではヤントケとヒルガー編のドキュメント集『無産者』（C. JANTKE, D. HILGER, *Die Eigentumlosen*. 後掲注25）に収録されている。S. 395–405, 特に S. 404.
13）W. H. RIEHL, *Die bürgerliche Gesellschaft*（1866 前掲注６），S. 288.
14）同上，S. 289.
15）W. H. RIEHL, 参照，C. JANTLE, u. D. HILGER (Hg.), *Die Eigentumlosen*（後掲注25），S. 404.
16）同上，S. 398.
17）W. H. RIEHL, *Die bürgerliche Gesellschaft*（1866 前掲注６），S. 281.
18）同上，S. 297.
19）同上，S. 381.
20）同上，S. 251.

と自己実現、その解決は労働者自身のクラブ・組合にある、という考えはリールの構想には含まれていない。『市民社会』の最後の箇所で、リールは明言する。《第四身分》においても《団体編成への希求》が起きなければならず、またそうなるだろう。しかしこの（第四）身分は《それによってまとまるはずはなく、幾つかに分裂する》。が、そのとき、中核たる《賃労働者という新たな社会集団》は《古くからの市民層に接続する》[21]ことになるだろう。

リールのこうした姿勢には、無理からぬものとして説明できるところもある。国民国家（ナツィオーン）という思念はまだ現実化していなかった。またリールも国民国家（ナツィオーン）の現実化を常に念頭に置いていたが、それを混迷の要素（第四身分はこれを体現しているとリールは見ていた）によって乱すことを忌避したのである。さらに身分の観念は、いにしえを頑なにまもるだけのものではなく、ある種の前線でもあったことも見ておくべきだろう。すなわち《まやかしの政治体制を掲げる》[22]絶対支配に抗する性格をもっていた。最後に挙げるべき、また特筆すべきことがある。《産業構造》[23]が形をとりはじめたのは、『市民社会』が刊行された頃だったことである。現実の惨状や貧困化は、ドイツでは、当初は近代産業化と直接的に結びついていたわけではなかった。貧困が関係していたのは、《人口統計的な大変動》[24]、すなわち《人口停滞》[25]や村落の窮乏であり、これらは少なくともその半ばは封建遺制に根差していた。これには、入会地の分割によって小作人たちが無一文になる事態[26]も含まれる。それに対して、村落の工業が工場生産に取って代

21）同上，S. 393.

22）この箇所だけでなく、リールへの全般的な批判として次を参照，Günther VOIGT, *Zur weltanschaulichen Entwicklung Wilhelm Henrich Rihels*. In: Deutsches Jahrbuch für Volkskunde 4/1958, S. 288–300.; Ingeborg WEBER-KELLERMANN, *Deutsche Volkskunde zwischen Germanistik und Solzialwissenschaften*. Stuttgart 1969, S. 29–36.; Hermann BAUSINGER, *Volkskunde*. Darmstadt 1971, S. 54–61.［邦訳］ヘルマン・バウジンガー（著）河野眞（訳）ヘルマン・バウジンガー『フォルクスクンデ・ドイツ民俗学 —— 上古学の克服から文化分析の方法へ』（底本1999: 3. Aufl.）文緝堂　2010.; Wolfgang EMMERICH, *Zur Kritik der Volkstumsidelologie*. Frankfurt a.M. 1971, S. 56–66.

23）《産業構造》(industrieller Ausbau) の概念についてはリンデを参照，Hans LINDE, *Das Königreich Hannover an der Schwelle des Industriezeitalters*. in: Neues Archif für Niedersachsen 1951, S. 413–443.; また《産業革命》（Industrielle Revolution）という概括的な言い方についてはヴェルナー・コンツェの批判を参照，Werne CONZE, *Vom „Pöbel“ zum „Proletariat“. Sozialgeschichtliche Vorausetzungen für den Sozialismus in Deutschland*. In: Moderne deutsche Sozialgeschichte, hrsg. von Hans-Ulrich WEHLER. Köln-Berlin 1966, S. 111–136, hier S. 112.

24）参照，本誌所収のルードルフ・ブラウンの寄稿「19世紀における社会文化の変化の諸問題」（Rudolf BRAUN, *Probleme des soziokulturellen Wandels im 19. Jahrhundert*. 本誌，S. 11–23.）

25）Carl JANTKE, Dietrich HILGER (Hg.), *Die Eigentumslosen. Der deutsche Pauperismus und die Emanzipationskrise in Darstellungen und Deutungen der zeitgenössischen Literatur*. Freiburg-München 1965, S. 15.

26）例えば次を参照，Georg Ludwig Wilhelm FUNKE, *Über die gegenwärtige Lage der Heuerleute im Fürstenthume Osnabrück*—(Bielefeld 1847) , JANTKE, HILGER（1965 前掲注25）所収，S. 101–111.

わられるなどの資本家的生産[27]は貧困の原因としては部分的であった。《無産者》に関する*カール・ヤントケ（1909–89）と*ディートリヒ・ヒルガー（1926–1980）のドキュメント集成[28]から得られる印象では、経済的（言い換えれば構造的）な救済手段はほとんど視野の外に置かれていた。数少ない例外としては、*ローベルト・フォン・モール（1799–1875）がすでに1840年に（もちろん匿名ではあったが）労働者たちを工場経営者の利得に与らせるべきことを説いていた[29]。また*ヴィルヘルム・ヴォルフ（1809–64）は、1844年にシレジアの織工一揆を描写し、その背景の分析をも行なっていた[30]。それに対して大半の文筆が話題にしていたのは、慨嘆と慈善アピールを除けば、（［訳注］下層の者たちの）嫉妬や欲望や放恣であった[31]。*フランツ・フォン・バーダー（1765–1841）は、《プロレタリアの市民化》[32]として身分をまたぐ経路に言及しており、またそれが聖職者（［訳注］司祭／牧師）にみられるものであるとしているのが注目される。さらに*イェレミーアス・ゴットヘルフ（1797–1854）は、同時代の世代には《勤勉な活発さ》や《自足を喜ぶ気持ち》や昔の《静かな忍耐》[33]が欠けていることを嘆いた。*フリードリヒ・ハルコルト（1793–1880）も、リールと同様、プロレタリアと《健気な手仕事職人》[34]を区別した。

往時の並行例を幾つか挙げたが、それらがあるからと言って、リールの発言の反動的性格ないしはリールが歴史に盲目であったことが変わるわけではない。たしかに『市民社会』は後の版になると修正が試みられた。それらも細かく比較することがもとめられるが、詰まるところ、その修正は、様にならないエッグダンスであった。初版の引き締まった体系性は姿を消し、代わって、パースペクティヴの狭さが否応なく明るみに出るからである。駄洒落になるが、初版ではプロレタリアは見知らぬ誰か（unbekanntes Wesen）であったのが、後の版で誰もが知るモンスター（bekanntes Unwesen）になっている。市民は、どうだろう。二世紀前には支配に抗して民（フォルク）の権利を主張していた市民だが、今は、

27）これについては次を参照，Rudolf BRAUN, *Sozialer und kultureller Wandel in einem ländlichen Industriegebiet (Zürcher Oberland) unter Einwirkung des Machinen- und Fabrikwesens im 19. und 20. Jahrhundert*. Erlenbach-Zürich-Stuttgart 1965.

28）参照，前掲注25.

29）(Robert von MOHL), *Die Vergangenheit, Gegenwart und Zukunft der politischen Ökonomie*. In: Die Eigentumslosen（前掲注25），S. 319–337, ここでは特に S. 336.

30）Wilhelm WOLFF, *Das Elend und der Aufruhr in Schlesien*. In: Die Eigentumslosen（前掲注25），S. 157–178.

31）たとえばシュタイン男爵（Freiherr vom STEIN）は、最下位の階級は《市民社会の中に様々な多諸階梯を生むことになる嫉妬や貪欲を一身の内に》巣くわせている、と記している（*Die Eigentumslosen*［前掲注25］，S. 133）。またフリードリヒ・アウグスト・フォン・デア・マルヴィッチ（Friedrich August Ludwig von der MARWITZ）は、1836年に、それらの人々の《際限のなさ》を細かく取り上げた（*Die Eigentumslosen*［前掲注25］，S. 134–148）。

32）参照，*Die Eigentumslosen*［前掲注25］，S. 292.

33）参照，*Die Eigentumslosen*［前掲注25］，S. 379.

34）参照，Werne CONZE, *Vom „Pöbel“ zum „Proletariat“*［前掲注23］，S. 120.

*ヴィルヘルム・ヴァイトリング（1808–71）が1842年に描いた言い方では《ブラウスとジャケットと上っ張りとシャッポを着た民（フォルク）》（［訳注］流行とは無縁の昔ながらの普段着）[35]を前に、自分たちの居心地のよさを見せつけるだけである。立てられた道路標識、それ自体は、ほとんど常に市民化へという一方通行路を指している。新しい（市民という）身分 —— 実際には、もはや身分（シュタント）ではなく、階級（クラッセ）という概念において自己の独自性をより鮮明に表すようになっており、前には根本的に変わった存在であったが、今や退行的な反動へ向かっている。

しかし、**市民化をめぐる書割り**は、所詮、**現実**とは重ならないと言ってしまえば、不当なことになるだろう。変わった存在とされるものも、他でもなく市民的・家父長制的諸関係から生い育ったのである。

初期の小規模な**工場経営者**に目を転じると、そこには原理的に新しいものはほとんどなかった。小さな工場経営者たちの暮らしは、家父長制的な単一性にあった。*ルードルフ・ブラウン（1930–2012）が多数の事例を紹介しているが、工場は、孤独な労働者にとっては、一種、家族や居間の代替物であった[36]。ブラウンによれば、工業化初期の経営者たちは、労働と楽しみを等しくするエートスを義務としており、労働者にもそうあることを要求した。ある織物会社の創業者の母親の言葉は、そのアネクドート的な結晶の観がある。彼女は、年に一度でよいから飽きるほどパンを食べてみたい、と言っていたのである[37]。余暇もまた、時間も空間も中心ではなく、労働の場から生まれたのである。昔は、労働や労働の場から切り離されていた多くのものが、新たに入り込むことになった。工場クリスマスや、新婚カップルへの企業からのプレゼントやそれに類したものが始まったのも、その時代からであった[38]。

工業化の家父長制的な出発点の様相について、おそらく最も有名な事例になるのは、企業家ファミリー**クルップ家**であろう。そこは、後に*《イェロー・ムーヴメント》（［訳注］労使協調路線）の起点ともみなされた。すなわち企業共同体のまとまりに社会的諸問題の主要な解決方法をもとめる運動である[39]。フリードリヒ・クルップは、その経営する鍛造工場に、もとは農民であった人々を受け容れた。彼らは、フリードリヒの息子*アルフレート・クルップ（1812–87）を家父長制的な労働共同体の親方へと育て上げた。実際、アルフ

35）ここでは次の文献から重引，Frolinde BALSER, *Die Anfänge der Erwachsenenbildung in Deutschland in der ersten Hälfte des 19. Jahrhunderts*. Stuttgart 1959, S. 100.

36）参照，R. BRAUN, *Sozialer und kultureller Wandel*［1965 前掲注27］，S. 205.

37）同上，S. 86.

38）同上，S. 96.

39）参照，Friedrich OLKE, *Geschichte einer klassischen Werksgemeinschaft (Zur Psychologie und Analyse des gelben Experiments)*. In: Die Arbeit 5/1928, S. 236–242.

レート・クルップは、ヴェストファーレン地方のスタイルにおける家父長であった。と同時に、最も近代的な資本家でもあった[40)]。そして家父長的な物の見方に固執した。その間にも工業労働者はとどまるところなく増大し、異なった経営スタイルが一般化していった。クルップ一族は、なお《家族》という言い方を続けていたが、またアルフレートは、その家族が《彼を裏切った》とこぼすことも屢々であった[41)]。

実際、同時代たちの見聞によれば、《エッセンのクルップ邸で目にするのは、へつらいと責任逃れと怠慢だけであった》[42)]。いわゆる企業家ファミリーは現実には変わってきていたのである。すなわち、一面では、膨大な数の労働者の流入は質の変化をもたらした。しかし他面では、空疎なジェスチャーではあれ、なおも《共同体》が誇示された。丘の上に邸宅を構え並木大路を買い上げた当主は、工場に顔を出すと古くからの労働者と握手を交わし、当主夫人は夜勤の労働者たちに時折バターを塗ったパンを振舞った[43)]。こうした《企業ファミリー》は、もはや取り戻せるものではなかった。しかし始まった当初は、《古参部隊》と自ら名乗る一団にとって、そうした交流と結びつきは現実そのものであった。これは、今のような事例だけではない。1848年にウルムで起きた*パン騒動では、評判のよくない新聞社主ニューブリングへの抗議の行列が組まれたとき、印刷工たちは鉄製の道具を手に取った。それは、自分たちの職場を防衛するだけでなく、明らかに経営者をも、さらに会社の一体性をまもるためであった[44)]。そうした一体性は、「ニューブリング歌唱団体」[45)]という形でも明らかになった。―― これは、私たちを二つ目の分野へ導いてくれる。いわば市民化の道程で、それは宣言されるにとどまらず、実際に踏み出されたのである。

労働者のクラブ・組合

クラブ・組合（フェルアイン／アソシエーション）は、19世紀の労働者層にとって中心的な意義をもった。実に、労働者文化の全てが、労働者フェルアイン文化から導き出されたと言ってもよいくらいである。しかし他ならぬそこで見紛いようがないのが市民的影響であった。労働者によるクラブ・組合は、市民のクラブ・組合を手本にして、また市民の助けを借りて設立されることが多かった。設立にあたっては、担保も資本もなく、然るべき

40）F. OLKE, *Geschichte einer klassischen Werksgemeinschaft*［1928 前掲注39］, S. 238.
41）同上, S. 240.
42）同上, S. 240.
43）同上, S. 241.
44）参照, Rudolf Max BIEDERMANN, *Ulmer Biedermeier im Spiegel seiner Presse*. Ulm 1955, S. 180.
45）「ニューブリング歌唱団体」（Sängerbund Nübling）については、同上, S. 116.

部屋も暖房もなかった。そうした困難を解決したのは、市民の篤志家やイニシアティヴを執った人々であった[46)]。また個々の団体では、市民のクラブ・組合との間で正式に後援を得る関係のこともあった。*ヘルベルト・フロイデンタール（1894–1975）が挙げる一例によれば、ハムブルクの労働者教養組合は1846年に「愛国協会」の正式な《支部団体》となったが、その目的は、《メンバーの間に、一般教養と道徳教養、並びにあらゆる美と崇高へ感覚を養うこと》にあった[47)]。この労働者教養組合が他でもなく「愛国協会」に支えをもとめたのは、ほとんどシンボリックな意味をもっている。事実、1859年の*シラー・フェスティヴァルでは、ハムブルクの労働者教養組合は1000人に垂んとするメンバーの参加を得て、最強のチームとなった[48)]。他の町で開催されたシラー・フェスティヴァルでも事情は似ていた。シラー顕彰祭の意義は、ドイツ全土を通じて何よりもナショナルな心情発露であった。

《祖国無き徒弟たち》の組合諸団体は、社会民主主義運動の指導者たちが輩出する母体でもあったが[49)]、これらも、市民的組合と同じくドイツの将来問題に関心を寄せた。1860年代の歌唱者フェスタや体操フェスタも、その労働者運動が、市民とならんで担い手であった[50)]。しかもこれらのフェスタは、何よりも先ずナショナルな心情発露の場であった。特に*ヴェルナー・コンツェ（1910–86）と*ディーター・グロー（1932–2012）が明らかにしたように、労働運動の根はソーシャルデモクラシー（社会民主主義）だけでなく、ナショナルデモクラシーにも延びていた[51)]。社会民主主義のこの姿勢は少し後にビスマルクの狙うところとなったが、それ自体は驚くにはあたらない。「インターナショナル」の先駆者*マルクス（1818–83）と*エンゲルス（1820–95）がすでにこう促していたのである。《ドイ

46）多数の事例から特にここで挙げるべきは、後の宮廷顧問官エードゥアルト・フォン・プファイファーがシュトゥットガルトの「労働者教養組合」の設立にイニシアティヴを発揮したことである。参照，Ingrid BENEKE, *Der Allgemeine Bildungsverein 1863 Stuttgart*. [Maschr.] Tübingen 1960. のみならず、プファイファーはロイトリンゲンでも「労働者教養組合」に取り組み、そこでは屢々絶望的な努力を要したことである。後者については次を参照，Brigitte SCHÖPEL, *Aus der Vereinschronik*. In: Reutlinger Naturtheater 1863–1963, S. 9–21.

47）Herbert FREUDENTHAL, *Vereine in Hamburg*. Hamburg 1968, S. 144.

48）同上，S. 146.

49）指導者では、たとえばフランクフルト（M）出身の《ラッサール主義者》ヨーハン・バプティスト・フォン・シュヴァイツァー（Johann Baptist von SCHWEITZER［訳者補記］1833–75劇作家・社会民主主義活動家・政治家）だが、またブラウンシュヴァイク出身の《アイゼナッハ派》ヴィルヘルム・ブラッケ（Wilhelm BRACKE［訳者補記］1842–80作家・出版人・社会民主主義活動家）にも当てはまるところがある。コンツェとグローの共著を参照，Werner CONZE, Dieter GROH, *Die Arbeiterbewegung in der nationalen Bewegung. Die deutsche Demokratie vor, während und nach der Reichsgründung*. Stuttgart 1966, S. 41.

50）参照，同上，S. 45f.

51）同上，S. 14f.

ツは全土を挙げてただ一つの不可分の共和国となるべし》[52]。したがって、ナショナルの意味については、労働者の場合、市民とは違った文意が込められていたことを考慮しなければならないが、その問題性自体は部分的である。他面で、ナショナルな座標軸は、市民化のテーゼを、労働者たち、少なくもそのオピニオンリーダーたちが取り入れていたことを示している。1862年にニュルンベルクにおいて開催された労働者大会では、代表的な登壇者の一人が、労働者たちに、孤立に陥ることを警告して、《市民身分との融合》を促した[53]。

ちなみに市民化をめぐる論議の近年の動向をみると、*ジョン・ゴールドソープ（1935–L）、*デイヴィッド・ロックウッド（1929–2014）その他の社会学者がアムブルジョワズマン（Embourgeoisement 市民化）を、経済的・関係的・規範的の三つに意味に区分している[54]。言い換えれば、経済的な同化、社会的な関わり方（ボーリングの夕べから結婚まで）に立ちはだかる制約の解消、さらに価値観の取り込みである。この区分を当時の状況にあてはめると、経済的な均整化や諸関係の同調は論外であった。しかし（それだからこそ）優勢な市民的規範は特筆され、屢々、厳格なまでに取り入れられた。市民層に経済面で合わせるのは当面は可能性がなく、日常生活での社会的制約もほとんど克服不能であることは明らかで、正にそれゆえに、特に組織された労働者たちは、市民層の文化的規範・形式に全力で向き合った。市民化の理論家たちが努力しがいがあると労働者たちに説いたのもこれであった。《教養は自由をもたらす》（Bildung macht frei）、労働者層のリーダーは、このスローガンを、後期啓蒙主義時代から取り出して、すでに前世紀（＝19世紀）の30年代に説いていた[55]。さらに19世紀から20世紀への転換期が過ぎてからも、労働者教養組合のフェスタには、このスローガンが横断幕に掲げられた[56]。幅広い教養への意欲は、何百というクラブ・組合の記録にドキュメントとして見ることができ、そうした記録からは、成人学

52）「ドイツにおける共産党の要求」（*Forderungen der Kommunistischen Partei in Deutschland*. 1848）. In: Karl MARX, und Friedrich ENGELS, Werke, 5Bd. Berlin 1969, S. 3–5, hier S. 3.［邦訳］『マルクス=エンゲルス全集』（大月書店）第 5 巻, pp. 3–5.

53）参照, R. BRAUN, *Sozialer und kultureller Wandel*［1965 前掲注27］, S. 168.

54）John Harry GOLDTHORPE, David LOCKWOOD et al., *The affluent worker in the class structure*. Cambridge 1969.

55）参照, R. BRAUN, *Sozialer und kultureller Wandel*［1965 前掲注27］, S. 300. これと同じ伝統に属するものには、特にヴィルヘルム・リープクネヒト（Wilhelm LIEBKNECHT）が鼓吹したスローガン《知識は力なり》（Wissen ist Macht）がある。しかしリープクネヒトは、このスローガンにアグレッシヴな補強をほどこした。曰く、《力は知識なり》（Macht ist Wissen）。なおリープクネヒトが1872年に行なった記念講演「知識は力なり —— 力は知識なり」は今日ではファイデル=メルツによる教育学の資料集［1968 後掲注89, S. 60–70.］に収録されている。；また次を参照, Günther ROTH, *Die kulturellen Bestrebungen der Sozialdemokratie im kaiserlichen Deutschland*. In: Moderne deutsche Sozialgeschichte, hg. von Hans-Ulrich WEHLER. Köln-Berlin 1966, S. 342–365, hier S. 344.

56）参照, Brigitte SCHÖPEL, *Das „Naturtheater.“ Studien zum Theaer unter freiem Himmel in Südwestdeutschland* (Volksleben, Bd. 9). Tübingen 1965, S. 80f.

校や市民大学あるいは市民の文化の夕べなどの活動と重なるものがある。またユーモアをきかせたレコードがある。そこには、息子にもっと高い教養をつけさせてはと言われたハムブルクの女性労働者が返した答えが吹き込まれている。*《ザンクト=パウリ・スポーツ組合、これさえあれば！》[57]。むろんパロディーにまで落としてあるのだが、それでも、当時頭をもたげていた文化、それも**文化のすべて**を自分の手につかもうとする幅広い意志を映している。

もとより、ここに市民化理論の単純拡大化した行動のみを見るのは誤りである。ハムブルクの母親が望んだのは、（市民化として言い立てられるプログラムに当初からつきまとい、しかし明言されないまま仄見える）数々の**制約**への反応でもあったと解するなら、はじめてまっとうに受けとめたことになる。それは、リールの論説にも（細部には踏み込みはしないものの）響いていたものでもあった。労働者のための《精神の体操稽古場》を促したのがそれである。そのときリールは、すなわち労働にともなって起きがちな思念を《工場プロレタリアートにおける社会的危険性》ととらえた。そこでの《沈思・予感・夢想》であり、それゆえこう希求した。《彼らに考えることを禁じるなどはするべきではなく、できもしない、そうであれば唯一の解決は、彼らの精神を、健康で自然に即したイメージへと誘導すること》である[58]。この言及は、文脈から明らかなように、一歩一歩進むしかない教育学的法則とわずかながら重なるところがある。あるいはむしろ、市民的教養の一部に的を合わせている。市民的教養を、社会的な抑制・抑制効果をもつ手段として取り出すことを説いているからである。その点では、古くはスイスのグラールスの牧師*クリストーフ・トリュムピ（1739–81）の見解、《ことほぐべきは恭順、……これぞ共和国の学び舎》[59]とかさなる枠付けを狙っているとも言える。また新しくは、プロイセン王*フリードリヒ=ヴィルヘルム4世（在位1840–61）が臣下たちに勤勉な市民となることを欲したのも同工である。王は、教員養成の《簡素化》を図って、国民学校生への幅広い学校教育を斥け代わりに宗教性の強い暗唱教材を前面に置くという学校要領を推し進めた》[60]。

かかる限定に抗ったのが、特に労働者層の組織された人々の間で起きた幅広い教養への要求であった。**限定された市民化への抵抗としての市民的価値・規範・諸形式** —— 労働者層と市民層の外面的な聯携が破綻し経済面での交流と移行が委縮したとき、市民的内実が依然フィールドを支配していたと見るのが、事態を本質的に説明することになると筆者

57）このレコードについて知見を与えられたヴァルター・ヘーヴァーニック（Walter HÄVERNICK［訳者補記］1905–83, ハムブルク歴史博物館長）に感謝する。

58）参照，W. H. RIEHL, *Die bürgerliche Gesellschaft*（1866 前掲注 6），S. 371.

59）引用句は R. ブラウンによる。参照，R. BRAUN, *Sozialer und kultureller Wandel*［1965 前掲注27］，S. 94.

60）参照，Theobald ZIEGLER, *Die geistigen und sozialen Strömungen Deutschlands im neunzehnten Jahrhundert*. Berlin 1911, S. 287.

は考えている。もとより1860，70年代に起きたことがらをさらに詳しく分析するには、*《ラッサール派》すなわち「全ドイツ労働者協会」（ADV）のメンバーと*《アイゼナッハ派》（VDAV）の区別に注目する必要があるだろう[61]。しかしここでは概観に主眼を置いており、そのため細部に分け入るのは諦めようと思う。また諦めるのには理由がある。経済面で鳥瞰すると、ドイツの場合、19世紀半ばを超えてからもずっと労働者層は特殊な諸条件の下、独特の性格を有していたことが視野に入るからである。と共に、仔細に見るなら、新しいものをも古い手仕事的・家父長制的身分観念に融け込ませることができたリアルな特徴も浮かび上がるからである。とは言っても、遅くとも泡沫会社氾濫時代（［訳注］19世紀後半に産業革命が進展し、ドイツ帝国の成立で活況が頂点に達し、やがて1873年に金融恐慌が起きるまでを指す）の工業の爆発的発展は、労働者層の圧倒的多数にとって、同じ構造的条件を創り出し、そのため少なくとも労働者層の組織化された部分のほぼ全てが外面的には統一性をもつものと見られるようになった[62]。しかしそうした外観、すなわち前線の形成が、国民国家の発展とも相俟って、却って（少なくとも相対的には）統一性とも言える現実を出現させたところがある。1860年代以後しばらくの期間には規模の大きな労働者団体が幾つも成立したが、その特徴は、君主制支配とプロイセン王国への反対勢力の結集だったからである。泡沫会社氾濫時代の経済的二極化の進展は対立を先鋭化させていた。*社会主義者鎮圧法もそうした先鋭な対立の必然性と固定化につながり、そのため、同法が廃止されてからも、そこで出来上がった物の見方が大きく変わることはなかった。

対立が基本となった数十年が経過する中で、（市民的クラブ・組合とプロレタリアートのクラブ・組合の間の保護・被保護の関係のような）組織的な依存の意味の市民化はほぼ完全に姿を消した。クラブ・組合の中でも分裂が明らかになり、それは大規模なオーガニゼーションや聯合組織においてだけでなく、町や村でのクラブ・組合でも同様であった。*フェルディナント・ラッサール（1825–64）は、独自の労働者歌唱クラブの設立を呼びかけた[63]。それを受けて、その種のものが未だ存在しなかったところでも、1860年代には結成が相次いだ。フランクフルト・アム・マイン大都市圏についてその動向を調査した

61）参照，Helga GREBING, *Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*. München 1966.; Franz MEHRING, *Geschichte der deutschen Sozialdemokratie*. 2 Bde. Berlin 1960.; さらに詳しく跡付ける場合は、特にケルンの「労働者組合」（Arbeiterverein）とその1848年以後の展開を組み込むことが必要になろう。

62）統一性のある観点を示しているものとして、やや細かな資料だが、レーニング編集の『ブルンチュリ国家学事典』においてフーバーが担当した項目「労働者諸階級」の説明を挙げておきたい。参照，Art. *„Die arbeitenden Klassen“* von V. A. HUBER In: Dr. LÖNING (Hg.), Bluntschli's Staatswörterbuch in drei Bänden. Zürich 1869, s. Bd. I, S. 87–126.

63）W. I. LENIN, *Die Entwicklung der Arbeiterchöre in Deutschland*. In: Über Kultur und Kunst. Berlin 1960, S. 170f.; Otto RÜB, *Die chorischen Organisationen (Gesangverein) der bürgerlichen Mittel-und Unterschicht im Raum Frankfurt a.M. von 1800 bis zur Gegenwart*. Diss. Frankfurt a.M. 1964, S. 30.

オットー・リューブ（1924生）によれば、歌唱クラブとして「ラッサリア」を名乗る団体の他、「喜び」や「兄弟のきずな」や「くつろぎ」などが設立され、中には「アルプスの薔薇」の名称も見受けられた[64)]。リューブの研究からは、結社が禁止された数十年間には労働者たちの小グループが、市民的な手仕事職人のクラブ・組合に身を寄せた例もたしかに見受けられる[65)]。しかしそれと同時に、結社が禁じられた同じ期間にも、特にフランクフルトの郊外の町村の動向として、新たな労働者クラブがやや地下組織的なかたち設立されたことをも、リューブの研究は示している[66)]。そして社会主義者鎮圧法が廃止されてから2年後の1892年には、早くも歌唱者大会がベルリンで開催された。のみならず、そこで*「歌の共同体」が結成され、それは1907年に「ドイツ労働者歌唱同盟」（DAS）となった。同盟のメンバーは、1907年には100,000人、さらに1912年には165,000人（アクティヴなメンバーは100,000人）にまで増大した[67)]。そのさい労働者のクラブ・組合では、市民的なクラブ・組合とは対照的に、一段高い役員団が固定することはなかった。今日でも諸所で記憶が残っているが、労働者クラブと市民クラブはたがいに相手を《スタンドカラー歌唱者》と《コミュニスト》とののしり合うといった溝ができていた[68)]。

やや大きなフェスティヴァルが市民的と銘打たれるところでは、労働者のクラブは参加を見合わせた。これについては、*ギーゼラ・ヤークス（1944–L）が、リューベックの民衆祭と記念フェスタに関する興味深い調査研究を行なった[69)]。社会民主主義の諸紙は、イヴェントにおいて高まる一方の狂信的愛国主義を攻撃し、他方、イヴェントの祝辞や市民系の新聞は声を高くした。《真正の民（フォルク）は……右派闘争などしようとせず》、偏に《理想の国民的文物》を信じるものだ[70)]。しかし《真正の民（フォルク）》という言い方自体が、すでにリールにおいてそうであったのと同じく、現実を無視した抱え込み志向であった。《愛国心という痴呆には吐き気がする》とは*ヴィルヘルム・リープクネヒト（1826–1900）の言葉だが[71)]、それは決して社会民主党中央だけのものではなかった。リューベックの射撃祭において《ナショナリズムを使嗾するスピーチ》が増える中、職業団体

64）O. RÜB, *Die chorischen Organisationen*（1864 前掲注63），S. 78.
65）同上，S. 78.
66）同上，S. 79.
67）同上，S. 35f.; W. I. LENIN, *Die Entwicklung der Arbeiterchöre in Deutschland*（1860 前掲注63），S. 170.
68）参照，H. PFEIFFER, *Vereine in Geislingen.* Mschr. Tübingen 1960.; 両者の間に総じて溝があったことについては次を参照，Karlheinz WALLRAF, *Die „Bürgerliche Gesellschaft“ im Spiegel deutscher Familienzeitschriften*（1939後掲注94），S. 94f.; Rudolf JAHN, *Sudetendeutsches Turnertum*. Frankfurt a.M. 1958, S. 190.
69）Gisela JAACKS, *Das Lübecker Volks- und Erinnerungsfest (Allgemeines Scheibenschießen). Untersuchugnen zur Entstehung und Entwicklung eines Großstadt-Volksfestes*. Hamburg 1971 (Volkskundliche Studien, hg. von Walter HÄVERNICK und Herbert FREUDENTHAL, Bd. V.)
70）G. JAACKS, *Das Lübecker Volks- und Erinnerungsfest (Allgemeines Scheibenschießen)*.（1971 前掲注69），S. 78.
71）W. CONZE, Dieter GROH, *Die Arbeiterbewegung in der nationalen Bewegung*（1966 前掲注49），S. 93.

（［訳注］ギルド的な団体）やその種の聯合組織が数多く参加するのに対して、《民（フォルク）》の多くはもはや顔を出さなくなった[72]。だからと言って、それによってイヴェントの性格が変わることはなく、むしろ固定された。

市民化の標識の下で

しかしこのようにして、前線はのっぴきならぬものとなっていった。1914年のナショナリズムへの飛躍は決して偶然ではなかった。それには、ここで簡単になりとも、修正主義というキイワードに触れておかなければならない。*エードゥアルト・ベルンシュタイン（1850–1932）の1899年の見解は、さしずめそれを代表していた。プロレタリアは祖国を持たないという主張は真実では《なくなる一方であり》、《社会民主主義の影響が強まるに連れて、労働者はプロレタリアから市民へと変わってゆく》[73]と言う。しかし修正主義が時代に及ぼす影響は、広範な作用の点では、第一次世界大戦の前には過大評価するわけにはゆかない。少なくとも、厳密なコンセプトとストラテジーとして理解する限りではそうである。これを言うのは、同時に、ナショナリズム的転回のやや空虚かつやや幅広い前段階が考えられるからである。ちなみに自ら労働者であり労働者の息子でもあった*ヴィルヘルム・ブロメ（1873–1926）の回想によると、その両親の家では、聖者たちの肖像と並んで、皇帝ヴィルヘルム2世、モルトケ（1800–91）、ビスマルク（1815–98）、ラッサール（1825–64）、アウグスト・ベーベル、ヴィルヘルム・リープクネヒト、カール・マルクスの肖像写真が壁に貼られていた[74]。むろんこれ一例だけなら、疑う余地のない証拠とまでは言えないだろう。しかし、出自がまるで異なった文化的標識を並列している事例は他にも多数みられるのである。と共に、解釈の難しい現象でもある[75]。説明として、ここには二つの世代の見解がオーバーラップしていると見ることはできる。1848年革命の伝統に立つ社会民主主義の世代と、遅くとも1870年代には浸透していた決然たる社会主義の世代である。しかし決定的なこととして、新しい物の見方が完全に浸透したわけではなかった。先に引用した事例に立ち返った場合、壁の飾り方におけるある種の惰性をも考慮するな

72）G. JAACKS, *Das Lübecker Volks- und Erinnerungsfest (Allgemeines Scheibenschießen)*.（1971 前掲注69），S. 65–67.

73）Eduard BERNSTEIN, *Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie,* S. 144. ここでは次の文献からの重引，Werner HOFMANN, *Ideengeschichte der sozialen Bewegung des 19. und 20. Jahrhunderts*. Berlin-New York 1971 (2. Aufl.), S. 181.

74）参照，G. ROTH, *Die kulturellen Bestrebungen der Sozialdemokratie im kaiserlichen Deutschland*（1966 前掲注55），S. 347. ロートの論説は、以下に挙げるテーゼにとって原理的な意味をもつ。

75）参照，同上，S. 347, S. 365f.

ら[76]、聖人畫や支配者像はさして意味のない残存物（レリクテ）と見ても構わないだろう。あるいは、むしろそこに見られるのは、国民国家（ナツィオーン）と階級への（アメリカの社会学者*ロビン・M・ウィリアムズ（ジュニア1914–2006）の概念をもちいるなら）《二重のロイヤリティー（忠誠心）》[77]で、事実、それはセダンの戦い（［訳注］1870年9月1–2日に普軍が仏軍に圧勝しドイツ帝国への道が開かれた）の後に固まった観がある。しかしロイヤリティーという言い方は軽くバランスをとることを指すには大層すぎやしないかとの異論も起きるだろう。事実は、（近年の社会学の概念を拾うなら）定かには規定できない《ジグザグ・ロイヤリティー（忠誠心）》[78]であった。先に挙げた名前の列挙に見られるのは、窮状の中どんな聖者や聖女でも、言うなれば*アレクサンドリアのアポローニア（?–249）から*クラーラ・ツェトキン（1857–1933）まで受け入れる救いようのない権威信奉である。さらに、それ以上の説明可能性も看過すべきではない。労働者層の自覚的な文化意志は、必然的に、ナショナルな内実と市民的姿勢を受け容れるところへ延びていったことである。そのさい、どの程度までの鮮明さであったかはともかく、それらをインターナショナル化することも加わった。

つい最近刊行された初期の労働者演劇に関する研究では、1887年に初演された*ヴィルヘルム・ルートヴィヒ・ローゼンベルク（ウィリアム・ラドウィッグ・ローゼンバーグ 1850–1930s）の作品『選挙戦を前にして』が印刷された[79]。劇中、一人の労働者が、市民による市民化アピールをパロディー化する。

> 諸君、気高い友人たち、この瞬間、祖国の安寧が再び決せられるこの時にあたり、その気高い息子たる我らは、祖国の為に胸を高鳴らせているのであります。この偉大な瞬間、かつてないほど、国家とそのリーダーたちの支柱たることを天職とする男たちの率いるところに馳せ参じるのは、いつにも増して意義あることであります。……

76）これらの諸現象については、目下緒に就いた壁飾りを枠組みとして徹底した議論がもとめられる。次の諸文献を参照，Wolfgang BRÜCKNER und Christa PIESKE, *Trivialer Wandschmuck der zweiten Hälfte des 19. Jahrhunderts. Aufgezeigt am Beispiel einer Bilderfabrik*. In: Anzeiger des Germanischen Nationalmuseums Nürnberg 1967, S. 117–162.; Hannes STURZENEGGER, *Volkstümlicher Wandschmuck in Zürcher Familien – Wesen und Funktion*. Zürich 1970.; Martin SCHARFE, Rudolf SCHENDA u.a., *Wandschmuckforschung am Tübinger Ludwig-Uhland-Institut*. In: Zs.f. Volkskunde, 66 (1970), S. 87–150.; Heinz SCHILLING, *Wandschmuck unterer Sozialschichten. Empirische Untersuchungen zu einer kulturalen* Phänomen und seiner Vermittlung. Frankfurt a.M. 1971.

77）参照，W. CONZE, D. GROH, *Die Arbeiterbewegung in der nationalen Bewegung*（1966 前掲注49），S. 105.

78）この概念はアメリカのロビン・M・ウィリアムズに由来する。参照，Robin M. WILLIAMS, *Die Amerikanische Gesellschaft*. Stuttgart 1953, S. 493.［訳者補記］原著：*American Society: A Sociological Interpretation*. New York 1970.; また次を参照，Lewis A. COSER, *Theorie sozialer Konflikte*. Neuwied-Berlin 1965, S. 94.［訳者補記］原著：*The Functions of Social Conflict*. New York-London 1956.

79）この作品についてはドイツの初期労働者演劇に関する次のドキュメント集成を参照，Friedrich KNILLI und Ursula MÜNCHOW, *Frühes deutsches Arbeitertheater. Eine Dokumentation*. München 1970, S. 167–198, hier S. 190f.

諸君、諸政党があまたの頭をもつ怪蛇さながら王冠と祭壇を脅かすこの時、我らの祖先より持ち伝えられし神聖なる慣習と思念を不和と悪意と新奇欲とが蝕むこの時、祖国を持たぬ徒党の腐敗・蚕食の毒液を前に確かな何ものも現れぬこの時、現実を無視して未熟な民衆に向けて自由・平等・博愛のまぼろしのスローガンを押し立て、酸鼻を極むフランス革命をまたもや起こさんとする下劣なる獣欲の使嗾されるこの時、この忌まわしき時局にあたり、吾人は諸君にこう呼びかけたい。国賊に票を投じるな、と。

うまく作ったものである。ウィットを効かせ、仮面を剥ぐ修辞の数々。果たして、聴衆から弁士に向けて讃辞が飛ぶ。《よく言った。大統領！》。それだけに、驚かされることがある。この芝居に限らず、他の演劇作品でもそうだが、労働者たちの語り口は、話題が自分たちの悲惨な状況になるや、これと変わらぬ深いパトスが吹き込まれ、同じような比喩を詰め込んだものとなることである。（結論をやや急ぎ過ぎるきらいはあるが）それは正に市民的と名づけてよいものであった。

労働者劇場の分野における市民性との交錯については、他にも、もっと明瞭な証左がある。資本の利害からの一方的なストライキ調停に抵抗した演劇作品に、*アウグスト・カッペル（1844–1922）の『ドクター・マックス・ヒルシュクーあるいは偽善者の作業センター』がある。正にアジテーション演劇で、初演は1872年のベルリン、「全ドイツ労働者協会」（ADAV ⇒ラッサール派）の創立十周年記念イヴェントにおいてであった[80)]。注目すべきは、この政治的アジテーション作品の上演に先立って、会長のスピーチがあったのは当然だが、それだけでなく、*「アンドレーアス・ホーファー行進曲」、ポップーリ「オッフェンバッキアーナ」（［訳注］今日このタイトルで知られるロザンタール編曲版より前のメドレー作品）と*フロトー（1812–1883）の「マルタ序曲」が演奏された。その後のプログラムでも、政治的なナンバーは《市民的》娯楽の間に組み込まれていた。したがって、「全ドイツ労働者協会」が警戒と監視の機関たることを危うくしかねないパッケージだったわけだが、それだけではない。むしろ、特殊な政治的内容を労働者たちの間に入りやすくしたのであり、また外に向かっては、それが安心できる文化的位相であることをデモンストレーションしたのだった。

それと似た動きは、数多くの労働者歌唱クラブにおいてもみとめられた。いわゆる*トレンド合唱曲（傾向合唱曲）の名称の下に独特のジャンルが発展した。そこで親しまれたのは*ハインリヒ・ハイネの詩歌への曲付けで、市民の歌唱クラブにおける*ルートヴィヒ・ウーラント（1787–1862）詩歌の合唱に照応する。作曲家では、*ヴェンデリーン・ヴァイ

80）同上，S. 156f.

スハイマー（1838–1910）、またとりわけ*グスタフ・アードルフ・ウートマン（1867–1920）が好まれ、あだかも市民層の初期の歌唱運動における*フリードリヒ・ジルヒァー（1789–1860）に比肩した[81]。そうしたトレンド合唱曲の中には長さにおいても荘厳な様式でもオラトリオを踏襲するものまである他、伝統に根差した意義深い合唱作品の難曲を真剣そのもので上演することもあった[82]。つまり何も変わったところはなかった。言い換えれば、それは、市民的文化が中心を占めていたことを意味している。ちなみに（よく使われたアネクドートだが）1913年、帝国議会の議長団に社会民主党からはじめて入った*アウグスト・ベーベル（1840–1913）は先ずこう質された、《貴君はフロックコートをお持ちですかな》[83] —— これに類したことが起きていたのである。したがって、労働者層の文化的な模索は、ただの適応というだけではなかった。むしろ審美的な**儀式重視**[84]、それも《高所テスト》としてであり、文化という高山のてっぺんでも呼吸困難をきたさないことを証明するデモンストレーションだったのである。

こうした行き方が定められ、またそれが定めるところとして、アンチ市民的なトレンドの所作は（その形態に厳かさがなく、いわば非市民的であるときには）受け入れられなかった。ちなみにヴィルヘルム・リープクネヒトは、*ゲルハルト・ハウプトマンの作品における《平板・無趣味・醜悪》、すなわち《小市民的反動性》を批判した[85]。そして、自然主義をそう裁断することによって、リープクネヒトはグロテスクにも、《自然主義という下等藝術》[86]を指弾する小市民的＝反動批評家と歩調をともにした。さらに、これまた社会民主党のエリート執行部役員の姿勢だけではなかったことを示すインデックスがある。労働者たちが書物をもっていることや図書館から借りている冊数へのわずかな言及[87]からだけでも、市民的な書物感覚は労働者たちを基本的に律していたと見るほかないので

81）参照，O. Rüb, *Die chorischen Organisationen (Gesangverein) der bürgerlicen Mittel- und Unterschicht*, S. 118f.

82）同上，S. 82–85 und S. 117–124.; またルードルフ・ブラウンの指摘も参照，R. Braun, *Sozialer und kultureller Wandel in einem ländlichen Industriegebiet (Zürcher Oberland)*（1965 前掲注27），S. 359.

83）参照，Hans Speier, *Verbürgerlichung des Proletariats?* In: Magazin der Wirtschaft, hg. von R. Bernfeld, N.F. 1931, S. 591–596 und S. 633–638, hier S. 593.

84）儀式重視（Ritualismus）については、たとえば次の論説を参照，Friedrich Neidhardt, *Zwischen Apathie und Anpassung. Unterschichtenverhalten in der Bundesrepublik*. In: Hamburger Jahrbuch für Wirtschafts- und Gesellschaftspolitik 15/1970, S. 209–225.

85）ロートからの重引，参照，G. Roth, *Die kulturellen Bestrebungen der Sozialdemokratie im kaiserlichen Deutschland*（1966 前掲注55），S. 352.

86）これについては次を参照，Theodor Geiger, *Zur Kritik der Arbeitspsychologischen Forschung* (1931). In: Ders., Arbeiten zur Soziologie. Neuwied und Berlin 1962, S. 151–167, hier S. 151.

87）参照，G. Roth, *Die kulturellen Bestrebungen der Sozialdemokratie im kaiserlichen Deutschland*（1966 前掲注55），S. 361.; また次を参照，R. Breda und Jul. Deutsch, *Das moderne Proletariat. Eine sozialpsychologische Studie*. Berlin 1910, S. 96f.

ある。むろん同じではなかったが、主要な違いは、あらゆる不真面目（ふまじめ）やただの娯楽を非難するときの厳しさ、ときには頑迷さであった[88]。娯楽の中でも特殊な諸形式は労働者には供されず、また労働者が手掛けることも、手掛けようとすることもなかった。これは、やや後の展開に注目すると、小さからぬ意味をもつ。労働者層の大多数が、正に娯楽を介して市民的中流社会に包摂されることになったからである。もっとも、それは市民的中流社会と言うより、大衆社会として把捉できる性格のものであった。

かく文化的な形式と姿勢に同じ方向への収斂が起きたことに注目したが、だからと言ってそれは社会的接近では断じてなかった。つまり相互交流における敷居の解消という意味ではない。市民社会は、労働者が文化的な成人証明をどれほどデモンストレーションしようとも受け入れなかった。内的にも外的にも、距離はあまりにも大きかったのである。たしかに19世紀半ば頃の理論家たちにとって、市民化は、自己の（貴族からようやくもぎとった）立場の支えとなるべきスローガンであり、事実、統合が志向された。もっとも、そこで掲げられたのは時代遅れの社会観であった。たとえばリールとその先行者が呈示した市民的＝家父長制的特徴も決して消えてはいなかった。また教会の営為と呼び掛けに目を転じてもよい。1848年の情勢に寄せた*ケッテラー卿（1811–77［訳注］1848年に国民議会代議員、1850年からマインツ司教）の見解[89]から、教皇レオ13世の1891年の*回勅「レールム・ノヴァールム（新しき事態について）」を経て、教皇ピオ11世の1931年の*回勅「クアドラジェジモ・アンノ（四十年に因んで）」に至る流れである[90]。が、そこで注目されるのは、《心情》が基本的キイワードとなっていることである。すなわち、広範な心情変化、それも市民的＝身分制的社会観念とむすびついたものが、よりよき方向への転換につながる、とされる。こうした教会からの福音が民衆の一部に、労働者も人間であるとの意識をはじめて呼び起こしたとみてよい証拠がある[91]。またその点では疑う余地もなく、カトリック教会

88）同上，S. 362.; なお、特に第一次世界大戦直後から、社会主義の立場からの文化観念の手直しが起きたが、ここでは立ち入らない。またこれについては次を参照，Robert von ERDBERG, *Fünfzig Jahre Freies Volksbildungswesen*. Berlin 1924.

89）1848年にケッテラーは《我らの社会的惨状は、外的な苦境によるものではなく、内的な心情の故である》と語った。この引用文の文献として次を参照，W. CONZE, *Vom „Pöbel“ zum „Proletariat“*（1951 前掲注23），S. 131. のみならず、ケッテラーの1864年の論説「労働者問題とキリスト教」も同じ方向を示している。参照，Bischoff KETTELER, *Der Arbeiterfrage und das Christentum*. 今日では次の資料集に収録されている。*Zur Geschichte der Arbeiterbildung,* hg. von Hildegard FEIDEL-MERTZ. Klinkhardts Pädagogische Quellentexte. Bad Heilbrunn 1968, S. 28–35.［邦訳］ヴィルヘルム・エマヌエル・フォン・ケッテラー（著）桜井健吾（訳）『労働者問題とキリスト教』晃洋書房 2004.

90）回勅『クアドラジェーシモ・アンノ（四十年目）』への批判的論説として次を参照，Heinrich MARTENS, *Die Enzyklika „Quadragesimo anno“. Ein Beitrag zum Thema: Kirche und Faschismus*. In: Die Arbeit, 8/1931, S. 653–668.

91）たとえばフォアアールベルク（［訳注］オーストリア西端の州）からの報告では、1891年の回勅の帰趨として、多数の（その中にはイタリアからやって来た者が多かった）鉄道建設の作業員の間では、回

の救済機関が発する体的作用に劣らずプロテスタント教会の国内ミッションの感化力も大きかった。しかしこれらの福音が確かなものとしたのは、何とも古いタイプの主人―召使の関係であった。19世紀後半の市民社会に流布していた物の見方に注目すればするほど、そこで強く印象づけられるのは、市民化のスローガンは距離の確認とその正当化である。労働者は、依然、主体ではなく対象であり続けたのである。

これは学校の教科書で様々なかたちであらわれた。労働者がドイツの授業で登場するのは、先ずは産業ロマンティシズムにおいてであった[92]。しかしそれは、一面的な教育学のせいばかりではなかった。むしろ教育学の方が、一般の物の見方を反映していたのである。ドイツの市民的文藝の中のアクチュアルで《進歩的》な作品でも、労働者と労働者層が取り上げられる度合いは小さくばかりだった[93]。当時のリベラルな性格の勝った雑誌、具体的には*『庭のあずまや』や*『我が宿』について*カールハインツ・ヴァルラフ（1914–2004）が行なった研究によれば[94]、今取り上げているような問題について果たした役割では、市民の解放感覚は遅れ勝ちどころかブレーキがかかったような状態だった。ちなみに、はじめ『庭のあずまや』に聯載された*E. マルリット（1825–1887）の人気小説『金髪のエルゼ』には一人の革命家が描かれている。士官だったが、1848年革命後、除隊を強いられ、また家族との折り合いにもたいそう苦労する。その彼の敵役は、貴族たちである。それに引き替え、プロレタリアートは死角に入ってしまっている。

他にも、もっとめざましく、ややいかがわしい例がある。雑誌*『報知週覧』がリベラルな色合いであることを知っている人は、少なくとも社会の最新の状況やそれと関係した市民的自虐を期待するだろう。しかしその1840、50、60年代のナンバーの見出しを見る限り、労働者階級は端役でしかなく、それもまるで冴えない役割なのである。1848年以前には、コミュニストへの怖れは大きな話題で、リールの判断によってすら、革命に大きな役割を果たしたのは実際のコミュニストよりも怖れの方であった[95]。しかし想像されたコニュニズム指導者[96]は、ともかくもアグレッシヴな批判の槍玉に挙がる体のものだった。第四身分とは、さしずめ大口を叩く愚かな無頼漢である。つまり1848年以後でも、

勅の後、開かれた新たな物の見方が浸透した。

92）例えば次を参照，Jörg EHNI, *Das Bild der Heimat im Schullesebuch*. Tübingen 1967 (Volksleben, 16), S. 184–192.

93）その確かな指標として挙げてよいのは、永く《詩的リアリズム》（poetischer Realismus）が優勢を保ったことであろう。なお《詩的》（poetisch）という術語は、ここでは、市民社会への社会美学的固定を含んでいる。

94）次の文献を参照，Karlheinz WALLRAF, *Die „Bürgerliche Gesellschaft“ im Spiegel deutscher Familienzeitschriften*. Diss. Köln 1939, S. 10f.

95）参照，W. H. RIEHL, *Zur inneren Geschichte des Socialismus*（1880 前掲注 5），S. 292.

96）「近時著名なるコミュニストの巨魁の展覧 ―― 事跡と自畫に拠りて」『報知週覧』5/1847, S. 168 und S. 174.

図版 1

無精髭を生やし酒瓶を抱えた浮浪者の安っぽいウィットが生きていたのである。ともあれここではプロレタリアートは、法螺吹きの徒弟と頭の悪い台所女中で表される。そこに韻を踏んだ文言が添えられている。さわりは徒弟が思い描く将来の夢である（図版１）。《いつか俺、親方にまでなったなら、徒弟どもには容赦なく、小僧どもはぶちのめす、今俺と親方そうである如く》[97]。他方、台所の女中は、主人たちの冷酷な仕打ちを嘆く。使いの者をねぎらうにも、女中は凍てついた飲食を出してやるしかない。シニカルなとらえ方で、事実、イラストの上方にはシニカルなタイトルが付いている、「奉公人階級の惨状」（図版２）[98]。また社会問題が、おまけ程度ながら、ぱっとしないウィットで扱われることもある。歯医者が患者にこう断言する。《下の方が長持ちするものです》[99]。そうかと思うと、飲食店のマスターは給仕をしながら《こいつは正真正銘バーデン高地の赤ですぜ》と言って、上流客をドキッとさせる（［訳注］バーデン高地は1848年革命において急進左派が一揆を起こした地として記憶される）[100]。

これが載っている1853／54年の同じ頁には、「社会問題の扱い方」という見出しが見える（図版３）。白い馬が牽く馬車に乗った父と息子の会話である。《父さん、白いのはもう

97）「徒弟の理想」（Lehrjungen-Ideale）In:『報知週覧』（*Fliegende Blätter*）19/1853−54, S. 181.
98）『報知週覧』（Fliegende Blätter）36/1862, S. 152.
99）同上，S. 43.
100）『報知週覧』（Fliegende Blätter）19/1853−54, S. 37.

Elend der dienenden Classe.

Bei der Commerzienräthin Zepperlmaier war Thee; es wurde auch Gefrornes servirt und durch einen noch nie dagewesenen Zufall blieben ein Paar Tassen übrig, welche dieselbe in einer Anwandlung ausschweifender Großmuth dem Küchen-

personale schenkte. Kaum aber hat die Köchin den ersten Löffel voll in den Mund genommen, als sie ausspuckt und ausruft: „Das ist doch impertinent! man kriegt ohnehin nie was vom Herrentisch, und geben's einem einmal was, so schicken's es so kalt 'raus, daß es auch nit zum genießen ist!"

図版 2

図版 3

持たないよ、麻痺が起きてこわばってるんだ》、《ふむ、ヴィルヘルム、その話はよそう、忘れるこった》（［訳注］弱ってきた白い老いぼれはプロイセン国王フリードリヒ=ヴィルヘルム 4 世のイメージと重なる）。正にその通り。と共に、これは『報知週覧』自体にもあてはまる。ぱっとしない歯切れの悪いユーモア以上に意味深長なのは、むしろ沈黙であろう。この週刊誌の拠り所に労働者層は存在しない。あるのは《社会》だけで、それは端的に上層社会、すなわち市民層である。労働者へのそうした無知は、それはそれで市民化テーゼのヴァリエーションと言えはするが、同時に、テーゼの空疎さとただの空想であることが露わになる。

社会の大多数がこうした距離を置いた無関心を立ち位置としていたことは、他ならぬ労働者を取り上げることを謳った学術書にもみとめられる。1906年、*ヴェルナー・ゾムバルト（1863–1941）の『プロレタリアート』が刊行されたが[101]、市民の側からの先入観に貫かれていた。ゾムバルトはまた、第一次世界大戦が勃発するわずか数年前にも、プロレタリアートには《祖国はない》と繰り返した。その発言を彼は訂正したのだが、変わり映えはしなかった。労働者には《根を張るべきふるさとがない》と言うのである[102]。したがって、ゾムバルトから見ると、労働者には《他の民衆諸集団では頻繁に見られる柔らかで非

101）　Werner SOMBART, *Das Proletariat*. Frankfurt 1906（Die Gesellschaft: Sammlung sozialpsychologischer Monographien / hg. von Martin BUBER, 1. Bd.）この論著は、マルティーン・ブーブーの編集する社会心理学の叢書「ゲゼルシャフト」の第一巻として1906年に刊行された。

102）　同上，S. 10.

合理的でセンチメンタルな特質》が欠けているのだった[103]。プロレタリアートを捉えているのは《強烈な知識主義》であるとゾムバルトは考える。プロレタリアートにとっては、《ものごとを感得すること》より《概念語のシステム》の方が重要で[104]、そうした半端な教養の故にプロレタリアートは必然的にフレーズやスローガンへ走ってゆく[105]。こうした判断の背景には、部分的には、型にはまった農民世界が控えている。プロレタリアートは《野の生き物と共に生育するのではない》[106]とは、咎めているのである。言い換えれば、人類学的恒常性に基準が置かれている。《根を張った村人》の対極たる《風来坊》であり、《風に吹かれる》木の葉として《次の瞬間には次の新しい吹き溜まりへ場所を移している》[107]。別の箇所では、ゾムバルトの見解は、独特の市民的なサロンの現実から導き出されたところがある。労働者には《野生の交配（それも一回切りではないことも多い）以上のものは》みとめられず、《どんな心痛も、どんな高尚なエロティシズムの香気ある輝き》も無縁である[108]。さらに、こうも言われる[109]。

> 家内で持ち伝える工夫や心の通うお喋り・遊び・読書によって育まれる家族という精神的共同体は、労働群衆の家ではとうてい問題にもならない。品位と教養あるあらゆる人々の高貴な女友達とも言うべき家庭音楽など知るよしもなく世代を重ねて行く。労働群衆の家では、シューベルトの歌曲もショパンのノクターンもついぞ響いたことがない……。

こういう的外れな比較の底流にあるトレンドが何であるかは、これまた見紛うべくもない。現実のプロレタリアートのまったくの誤認であるが、そうなったのは、プロレタリアートが無品位な存在形式と見えたからであった。文化の分野において進展する市民化のリアルな特徴は[110]、論説ではみじんもとらえられていないのである。たしかにゾムバルト

103）　同上，S. 10.
104）　同上，S. 82.
105）　同上，S. 86.
106）　同上，S. 9. なおこの農業を軸とした見解には、たとえば（ゾムバルトより刊行は後だが）ブレーダとドイチュの研究でふれられる日本の状況への言及やそれに類した報告が関係していたかもしれない。もっともブレーダとドイチュのプロレタリアート観はゾムバルトとは違っていたが。参照，R. BREDA und Jul. DEUTSCH, *Das moderne Preletariat*（1910 前掲注87），S. 13.
107）　同上，S. 43.
108）　同上，S. 71.
109）　同上，S. 32. かかる《野蛮人》呼ばわりは、これまた伝統があり、例えばゴットフリート・ケラーにもその種類の表現がみとめられる。参照，Gottfried KELLER, *Sämtliche Werke, 22. Bd*. Bern 1948, S. 87f.
110）　これを助長した一因には、《脱市民化》（Entbürgerlichung）に向けた警告も数えられるだろう。マルクスとエンゲルスは、プロレタリアートが市民化することを危惧したが、それはプロレタリアートの中

の著述にも市民化というスローガンは含まれているが、それは、当時急速に拡大しつつあった*会社員（専門職能者・サラリーマン）に向けたものであった。なお、この会社員の経済的状況は、労働者のそれと、久しく、よく並べられてきたが、しかしまた会社員は市民の陣営に引き入れられた。彼らもシューベルトの歌曲やノクターンが響くサロン文化にはとどかなかった。が、小市民的な存在形式と姿勢は、（いささか古臭く、安価なコピーだったとは言え）市民的な生き方に忠実であった[111)]。

民俗学の課題

今引用した家庭での音楽についてゾムバルトがさらに論じていることも注目すべきだろう。プロレタリアは、シューベルトやショパンによってリフレッシュすることができなかっただけではない。労働者には、《日曜の午後、シンベルあるいはアコーディオンが奏でる民の調べが胸を打つことも……あり得ない》[112)]。したがって、ここでもまた、エリート市民のサロン文化と並んで、清らかな農村世界が立ち現れる。そして、その両者をつなぎわたすのが、当初から市民化テーゼの一部でもあったもの、すなわち*ゲマインシャフト・イデオロギーであった[113)]。ちなみに民俗学（フォルクスクンデ）は、このゲマインシャ

に《買収され》て《特権化する少数者》が出現すること、労働者の中でのエリート的な組織原理への危惧の故であった。これについては次を参照，Frank DEPPE, *Das Bewußtsein der Arbeiter. Studien zur politischen Soziologie des Arbeiterbewußtseins*. Köln 1971, S. 20f.; これに対してレーニンの著作を通して見られるのは、プロレタリアートの中での市民化傾向に対するずっと根本的かつ全般的な攻撃である。この他、国民国家への忠誠も文化的側面にアクセントがおかれた問題であった。《文化共同体としての国民国家が、プロレタリアートにとっては、他の諸階級の成員にとってと較べて、決して重みが劣るわけではない》とは、ブレーダとドイチュのコメントである。参照，R. BREDA und Jul. DEUTSCH, *Das moderne Proletariat*（1910 前掲注87），S. 137.

111）　この観点から、一般には簡単に《キッチュ》のレッテルを貼られて顧みられない一聯の文化的現象を検討することは大事であろう。これに属するのは、たとえば《前庭の藝術》（Kunst im Vorgarten）で、エルケ・シュヴェートにそれを含む考察がある。参照，Elke SCHWEDT, *Volkskunst und Kunstgewerbe. Überlegungen zu einer Neuorientierung der Volkskunstforschung*. Tübingen 1970 (Untersuchungen des Ludwig-Uhland-Instituts der Universität Tübingen, Bd. 28), S. 96–115.; またライプツィヒの医師シュレーバー博士に因む特異な動機で知られ小菜園運動（Kleingartenbewegung）も、遅くとも第一次世界大戦直後の数年の間に土地投機を惹き起こすまでになった。参照，Otto ALBRECHT, *Deutsche Kleingartenpolitik*. In: Die Arbeit, 1/1924, S. 168–176.

112）　W. SOMBART, *Das Proletariat*（1906 前掲注101），S. 32.

113）　このゲマインシャフトの問題は、プロレタリアートをタイトルに掲げた論説よりも、ゾムバルトの他の論著においてより明瞭である。例えば次を参照，W. SOMBART, *Kapitalismus und kapitalistischer Geist in ihrer Bedeutung für Volksgemeinschaft und Volkszersetzung*. In: Bernhard HARMS (Hg.), Volk und Reich der Deutschen, 1. Band. Berlin 1929, S. 280–292. ここでゾムバルトは、テンニェスに直接的に接続するばかりか、さらに先鋭化させてもいる。《利害によるゲゼルシャフトは……不毛である。なぜなら本物の文化、つまり精神的文化も可能になるのはゲマインシャフトにおいてだけだからである》（S. 291）。

フトの旗印の下、労働者を無視してきた[114]。さらに、ゲマインシャフトが意味するのは村落的紐帯と結束であり、それゆえその旗印を掲げて、民俗学が労働者を組み込むことがあっても、正にそれゆえに、そこでは労働者の独自性は奪いとられていた。なおこれを指摘したのは*テーオドル・ガイガー（1891–1952）で、*ヴィル=エーリヒ・ポイカートの『プロレタリアートの民俗学』の刊行からほんの数か月後の書評においてであった。むろんそこでは、同時にポイカートの著作のパイオニア性も特筆されてはいる[115]。

なおこれと関聯して、民俗学について、やや特殊な咎め方をしなくてはならない。民俗学が果たした寄与とは、*《民のいとなみ》の概念の去勢、すなわちこの概念を社会的現実性と問題性から切り離し、型通りの風景畫たるべきことを義務づけたことであった。これまでふれたことがらに徴すれば、もはや改めて力説するまでもないだろうが、こうしたパースペクティヴを創り出したのは、民俗学そのものではなかった。もう一度、市民的な家庭雑誌を思い起こしてもよい[116]。そこにあるのは、《民のいとなみ》が工場と無縁なことを示す鮮やかな証左であった。伝統衣装でサクランボを摘みとっている乙女であり、ヨーデルを歌うチロールの人々であり、それに類した牧歌的な諸現象であった。しかし、そうした物の見方を神聖なものとして囲い込み、愛すべき学術的細部調査へと移し変えたのは民俗学であった。

この聯関の概略を具体例に即して挙げてみたい。19世紀末、テューリンゲンの家内工業に関して、*エマーヌエール・ザックス（1857–96）が一聯の研究を世に問うた[117]。ゾンネベルクの村落労働者の住文化の記述は強烈で警鐘的ですらあった。二階建ての家屋群の居住者は平均14.5人で、住まいとは言え、木彫を乾燥させるために夏でも温めていた。倉庫を兼ねた寝室では6人が2つのベッドに寝ていた[118]。食文化についても記されている。《朝はジャガイモ、昼はスープ、夜は皮も一緒に、と年中ジャガイモである》[119]。仕事については、進め方と仕事の分割を併せて、ザックスは詳しく記述している[120]。むろん経済的

114）　H. Bausinger, *Volkskunde*（1971 前掲注22），S. 88–105.［邦訳］p. 96–114.; また K.-S. クラーマー（Karl-Sigismund Kramer）への批判を含む筆者の「歴史民俗学の問題性」（*Zur Problematik historischr Volkskunde.* In: ZfVkde, 67 [1971] S. 51–62, hier S. 54–57）を参照。

115）　Theodor Geiger, *Rezension:* Will-Erich Peuckert, *Volkskunde des Proletariats, Bd. I*. Frankfurt a.M. 1931. In: Die Arbeit, 8 (1931), S. 650.

116）　参照，K. Wallraf, *Die „Bürgerliche Gesellschaft“ im Spiegel deutscher Familienzeitschriften*.（1939 前掲注94），S. 85. この箇所では《風俗畫》（Genremalerei）と《〈民のいとなみ〉という分裂した概念》に触れられている。

117）　Emanuel Sax, *Die Hausindustrie in Thüringen. Wirtschaftsgeschichtliche Studien. I. Theil*. Jena 1882, *II. Theil*. Jena 1884, *III. Theil*. Jena 1888.

118）　同上，I, S. 30–39.

119）　同上，I, S. 39.

120）　同上，I, S. 49–52, passim.

な諸関係にもふれられており、決まった型ではないものの搾取についても記され[121]、さらに家内工業という悪条件にも拘わらず工場労働への対抗がみとめられるのは、少なくとも自立した労働の輝きを保っていたからだった[122]。特にテューリンゲンの《民藝》に関する膨大な民俗学的記述は、何一つ見落としがないほどである。それは《受け継がれ、手の造形衝動がはたらくわざ》であると説かれ、また《民ならではの伝承の不壊の力》や《ここにあり続ける価値と力》や民藝の証左は、《山々に声を響かせる歌謡と同じく朗らかで屈託がない》と言う[123]。なお誤解を招かないために付言すれば、民衆の中のそうした人々を際立たせる創造的な力に注意を促すのは、もちろん、まっとうなことである。しかし、その着目も社会的背景の前に置かれてはじめて意味あるものとなる。が、民俗学の作業には、それが欠けている。

なお言い添えれば、ここでの引用も挙げた事例も、決して一面的に選んだのではない[124]。*ヴォルフガング・シュタイニッツ（1905–67）[125]までは、《労働者歌謡》と言えば手仕事の歌や手仕事職人の歌であり、諧謔を効かせつつ神を信頼し、貧乏を歌で乗り切る体のものであった。その観点から、1865年、つまり労働運動の絶頂期のちょうど中ほどに歌を集めたのが*オスカー・シャーデ（1826–1906）であった[126]。以後一世紀にわたって編まれた様々な歌集も基本はそれだったのである。

あるいは —— 最後の事例として、五月一日を挙げよう。その日の民のいとなみと言えば、緑の枝葉を挿したり、未婚の男たちの集団が一本の大木を立てたり、身持ちのわるい

121）興味深いのは、ザックス前掲書の第一部において、調査質問のへの返答の形で、問屋制家内工業の代表者の一人（［訳者補記］インフォーマント）が、著者（＝ザックス）と大学及び大学教授一般に対して抗議の姿勢を露わにしたことである。参照，同上，*Vorrede zum zweiten Teil*, S. VIIf.

122）同上，I, S. 49.

123）Edwin REDSLOB, *Thüringen (Deutsche Volkskunst, VII)*. München o. J. (1926), S. 29f.

124）例えば次を参照，Martin WÄHLER, *Thüringische Volkskunde*. Jena 1940, S. 80f. ここではアメリカ流のダンピング（不当廉売 Dumpingmethode）にも言及されはするが、総じて《山盛りのファンタジー》（Phantasiereichtum）とか《子供っぽいミニチュア・心温まるものへの愛好》（Liebe zum Kindlich-Kleinen, Gemütvollen）が、すでにレーツロープ（原注123［訳注］Edwin Redslob 1884–1973 民藝研究の著名なリーダー）において鳴り響いていたのと同じテノールで話題にされる。これは、ザックス（第二部，S. VII）が《テューリンゲンの森の真心のこもった民》を語るのとは根本的に違った性質のものである。

125）参照，Wolfgang STEINITZ, *Arbeiterlied und Volkslied*. In: Deutsches Jahrbuch für Volkskunde, 12 (1966), S. 1–14.

126）Oskar SCHADE, *Deutsche Handwerkslieder*. Leipzig 1865.「徒弟の楽しみ」（*Der Handwerksgesellen Trost*）のタイトルがつけられたシレジアの歌（S. 165）の場合、その第3節が社会批判の調子になっているのは矛盾であり、意図的ではなかったと見てよい。《金持ちは大邸宅で威張って暮らし／貧乏人は湿地で嘆く／だって幸せは富ではなくて、満足こそが豊かさだから／俺たちは誰もが兄弟、皆なが同じ》。同様の成行きとして注目してよいのは、リールが『市民社会』において引用している手仕事の徒弟の《諧謔調の》歌で、リールの考えでは決して告発の歌ではなかったのである。参照，W. H. RIEHL, *Die bürgerliche Gesellschaft*（1866 前掲注 6），S. 354.

娘の家の窓辺から種畜（［訳注］種馬・種牛・種豚など）の小屋までおがくずを撒いて線を引いたり、といったものである。その一方、民俗学の文献表に目を凝らしても、プロレタリアートの（おそらく「第二インターナショナル」の1889年の大会に遡る）五月の習俗は見当たらない[127]。少なくともドイツでは、五月の習俗には幾つかの要素が入り込んでいる。先ずは5月18日に行なわれていた1848年革命を記念するイヴェントで、やがてパリ・コミューンの追憶も重ねられた。この5月18日は、1870年以後は《アンチ帝国祝日》、つまりセダンの戦いの戦勝記念日に対抗する記念日となった[128]。その追憶日に取って代わったのがメーデーであった。しかし、そうした面から民俗学が話題にするようになったのは、*五月の祭儀が*《民族共同体》を旗印として開催されるようになった時からである。

《民族共同体》、これは市民化解釈類型のナチス版に他ならない。もっともその前から問題になっていないわけでなかった。他でもなく、特に1930年前後に会社員（専門職能者・サラリーマン）層が経済的にプロレタリアート化をきたす現実の下、社会民主党の中で起きた議論においてである。すなわち、会社員層のプロレタリアート化は法則的な動向であるのかどうか、あるいは、社会民主主義が、市民化というナショナリズムのプログラムを描くのは戦術的に当を得ていないのではないか、といった議論であった。

しかし市民化をめぐる幅広い議論[129]を論評することは諦めざるを得ない。また今日の

127）　例外と言ってよいのは、ハンス・トリュムピがバーゼル大学の員外教授へ就任するに際して行なった《自由の樹》の講演である。参照，Hans TRÜMPY, *Der Freiheitsbaum*. In: Schweizerisches Archiv für Volkskunde, 57 (1961), S. 103–122. ここでも、民俗学的禁欲とでも言うべきものがみとめられる。すなわち、フランス革命の伝統に由来する自由の樹について、トリュムピはこう述べる。《これを民俗学の十全な対象とみなすのは》正当ではない。なぜなら《精神的な上層がそれに託した抽象的理念は、民俗学の対象には重すぎる。すなわち、民間習俗が政治的プロパガンダに取り込まれたことを意味するからである》(S. 111)。これに対しては、政治的プロパガンダはそうしたものとして把捉されるわけにはゆかないという要求はできないだろう。筆者の見るところでは、原理的に非政治的な分野を以て、それこそ民らしきものであり、それゆえ民俗学に合った対象という限定は、見当違いである。他ならぬ、民衆色を帯びた国民的祭儀の伝統をもつスイスの場合、そうした試みはいささかグロテスクに映る。

128）　参照，W. CONZE, D. GROH, *Die Arbeiterbewegung in der nationalen Bewegung*（1966 前掲注49），S. 110–113.

129）　ここでは何にも増して考慮すべきはテーオドル・ガイガーの多彩な論説類である。Theodor GEIGER, *Zur Theorie des Klassenbegriffs und der proletarischen Klassen*. In: Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich, 54 (1930), S. 185–236.; DERS., *Panik im Mittelstand*. In: Die Arbeit, 8 (1931), S. 636–654.; DERS., *Zur Kritik der Verbürgerlichung*. In: Die Arbeit, 8 (1931), S. 534–553.; DERS., *Die Mittelschichten und die Sozialdemokratie*. In: Die Arbeit, 8 (1931), S. 619–635.; DERS., *Die soziale Schichtung des deutschen Volkes. Soziographischer Versuch auf statistischer Grundlage*. Stuttgart 1932.; なお労働組合関係の雑誌『労働』、特にその8号（1931年）を舞台に繰り広げられた広汎な議論から、筆者が注目するのは次の諸論説である。Max VICTOR, *Verbürgerlichung des Proletariats und Proletarisierung des Mittelstandes*. S. 17–31.; Ernst Wilhelm ESCHMANN, *Zur „Krise“ des Bürgetums*. S. 362–371.; Rudolf KÜSTERMEIERPPE, *Die Prletalisierung des Mittelstandes und die Verwirklichung des Sozialismus*. S. 761–774.; この他、先に挙げた次の文献もこの文脈に属する。Hans SPEIER, *Verbürgerlichung des Proletariats?*

社会的構図とその文化的局面[130]を個別になぞることも断念しよう。これこれでそれに特化した報告にふさわしいテーマがあり、19世紀に的を絞ったここでのテーマ設定の枠をはみ出だすからである。しかしまた、ここで示した諸々のコメントは、決して歴史への行き当たりばったりの切り込みなどではない。むしろアクチュアルな問題の歴史的位相を切り拓くはずである。つまり、市民化は、たしかに市民化という言い方から思い浮かべられかねないところはあるにせよ、決して空(から)のグラスを時間をかけて満たしてゆくような運びではなかった。書割りと現実との複雑な振り子運動をわずかでも注視するなら、19世紀初め以来の**労働者文化**という広大なフィールドを渾身の力で耕すことが促されるだろう[131]。労働者文化、これは、自己閉鎖的で自己の根に捉えられた自律的な文化と解するのではなく、支配的な市民的文化との（しばしば救いようのない絶望的な）交流にあるところの文化である。

しかし、歴史をめぐるコメントをほどこしたために、現今行なわれている余りにアバウトな市民化セオリーへの不信を掻き立てることになるかも知れない。事実、1950年代からは、《平準化された中流社会》や《均一社会》や《豊かな社会》が言い立てられている。むろんそれらは、そうしたスローガンから予想される以上に枝分かれをきたしている。またイデオロギーの余波、たとえば民族共同体イデオロギーのしぶとい生き残りが拡大する一方の消費動向とからんで上に挙げた諸々の仮説がスローガン的にポピュラー化するのを可能にした面もある。そこで、はじめのエピソードである。

> だって、労働者？　何を指してそう言うのだ。あのね、私はちょうどチロールでの休暇旅行から帰ったばかりなんだが、そこでは労働者が高級ホテルに泊まっているんだ。皆な自家用車をもっている。うちの近所にも労働者が暮らしているが、子供に高

（1931 前掲注83）．さらに Leonhard FRITZSCHING, *Der Mittelstand als Klasse. Zur Wirtschaftsethik des nicht-kapitalistischen Unternehmers*. In: Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich, 54 (1930), S. 705–726.

130）　参照，F. DEPPE, *Das Bewußtsein der Arbeiter*（1971 前掲注110）. ; Leo KOFLER, *Der proletarische Bürger*. Wien 1964.; Leo KOFLER, *Der asketische Eros. Industriekultur und Ideologie*. Wien 1967. コーフラーは本書において（S. 198）、労働者が市民性にただ同調するだけであるのと、労働者には依然として異質である市民性に意識的に一体化を図ることとを区分している。; Horst KERN, Michael SCHUMANN, *Industriearbeit und Arbeiterbewußtsein*. Frankfurt a.M. 1970.; これについては筆者の近著でも示唆的に触れた。参照，H. BAUSINGER, *Volkskunde*（1971 前掲注22），S. 253–260.［邦訳］河野（訳）『フォルクスクンデ・ドイツ民俗学 ―― 上古学の克服から文化分析の方法へ』（底本1999: 3. Aufl.）文緝堂　2010.

131）「ドイツ民俗学会」（DGV）のトリーアにおける大会（1971年）と（本編が収録されている）大会記録の論集のテーマ「19世紀の文化変容」は、この問題設定に直接的に伸びてゆく。これが重要な課題であること自体は見解の一致を見ている。が、この課題が《エスノロジー》という旗印の下でどこまで解決できるかは未知数である。《労働者文化》という概念をどこまで厳密に追求できるかという問いも、具体的な取り組みの中で明らかになるだろう。

いおもちゃを買ってやっている。最近、新聞にも載ったことだが、出稼ぎ労働者（ガストアルバイター）が —— 出稼ぎだよ！ —— それが半日出勤で一月3000マルク以上もらっているんだぜ。

民俗学のディシプリンは、こうした常連テーブルの会話のような曖昧さに左右されることがあり、また共同体概念を『ビルト紙』（［訳注］ドイツ最大の大衆新聞で日本のスポーツ紙と似ている）の読者集団に適用してしまったりもする。しかしまた、そうしたお喋りを打ち砕いて毅然とした（言い換えれば批判的）経験観察をすることもできる。当て推量の絡み合いを、それでもよいじゃないか、と放置しない《深層の経験観察》である。前世紀（＝19世紀）を振り返れば明らかになることだが、市民化の可能性は往々、と言うより多くの場合、感覚的に分かるくらいにまで制約があり、少なくとも慎重に気遣うべきものであろう。しかしまた市民化の書割り（［訳注］型・定式）は沈静と枠付けの機能をもっていた。その点では、現今も似ている面がある。むろん、それまた検証を要するだろう。

［ディスカッション］（大会発表の際の質疑について座長のまとめ）

バウジンガーの発表の中心は労働者の階級意識と労働者文化の問題にある。これについて、*ロタール・イーレ（1905–74）は、たとえばジーガーラントでは、19世紀末以来、労働者と市民の距離は、バウジンガーの報告で呈示されたほど大きなものではなくなってきている、と異論をはさんだ。*ディーツ＝リューディガー・モーザー（1939–L）は、歌唱クラブでは、特に社会的な差異はみとめられず、市民的伝統が労働者を吸収して久しいことを指摘した。また*カール・イルク（1913–2000）は、労働者が財産を持つようになっており、それによって有産者と無産者との対立は明らかになくなってきており、この有産志向において、労働者層の市民化の志向がよく表れていると述べた。

これに対してバウジンガーは、*ルール占領（［訳注］1923年）の際には、市民化していたプロレタリアートが、買い物に夢中になるなどの消費志向によって永く覆い隠されていた昔のプロレタリアートの伝統に突然立ち返った例を挙げた。さらに、今日でも特に南ドイツの工業地帯では、市民の歌唱クラブと労働者歌唱クラブが並立していることを挙げた。

*ハンス＝ユルゲン・トイテベルク（1929–2015）は賛意を表して、バウジンガーの報告は、自律的な労働者文化の証左を挙げるというより、むしろ市民化テーゼを取り上げたものと考えられる、と述べた。また労働者の動向は多様化しており、労働者を市民層とは異なった層序としてとらえることはできないとも述べた。さらにトイテベルクは、労働者文化の研究においては資料を揃えるのが非常に難しく、また労働者の記録は、知識人あるいは市民に類する人々によって書かれてきたことが多いことを指摘した。

バウジンガーはこれに同意して、自律性に貫かれたものとしての労働者文化は際立った

要素とは言えず、それを把捉するのは難しいと答えた。また労働者文化の急速な市民化の事実こそ、自分の考察の対象であったと補足した。

［訳注］

p. 135 **自己充足的予言**（self-fulfilling prophecy）　社会学者ロバート・K・マートンが提唱した概念。誤った判断や思い込みや風評などが新たな行動を引起し、当初の誤った判断や思い込みを現実化してしまう場合の、当初の判断や思い込みや風評などを指す。銀行が破産間近いという誤認や風評のために取り付け騒ぎが起きて実際に銀行が破産する事態などにみられる。**ロバート・キング・マートン**（Robert King Merton 1910–2003）米フィラデルフィアに生まれ、ニューヨークに没した社会学者。本来の名前はMeyer Robert Schkolnick、ロシア系ユダヤ人。タルコット・パーソンズと並ぶ機能主義の代表者で、コロムビア大学教授であった。［邦訳］柳井道夫（訳）『大衆説得 —— マス・コミュニケイションの社会心理学』（桜楓社1970：原書 *Mass Persuasion: the Social Psychology of a War Bond Drive*. 1946）；森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎（訳）『社会理論と社会構造』（みすず書房1961：原書 *Social Theory and Social Structure: Toward the Codification of Theory and Research*. 1949）

p. 135 **ヴィルヘルム・ハインリヒ・リール**（Wilhelm Heinrich Riehl 1823–1897）　ライン河畔で現在はヘッセン州都のヴィースバーデン市域となっているビーブリヒ（Wiesbaden-Biebrich）に生まれ、ミュンヒェンに没した文筆家・ミュンヒェン大学教授。青年期から達意の文筆家として知られたジャーナリストであった。革命ではなく社会改良を説き、また保守性が喜ばれてバイエルン国王にミュンヒェンに呼ばれ、ややあってミュンヒェン大学教授となった。精彩に富んだ多数の民俗記述を残し、また『学問としての民俗学』（*Volkskunde als Wissenschaft*. 1858）という有名な講演もあって、学問的な民俗学の父とも讃えられ、今日まで高い評価を受けている。とりわけ、グリム兄弟以後のロマン派の民俗学（神話学的潮流と呼ばれる）が上古の名残を追って珍習奇俗を収集と過大な意味付けに走る欠陥が露呈するに及び、その修正を図ろうとする方向からは、力強い指標と見られてきた。第二次世界大戦後に、ナチズムとの同調に至った従来の民俗学の克服が課題になったときにも、先ず起きたのは《リールに帰れ》という呼びかけであった。しかしまたリールについては、20世紀初頭からナチズムに至るドイツのナショナリズムの高まりのなかで、その流れに沿って好まれてきたという脈絡もみられる。さらにリールの思想そのものも、1848年の三月革命への保守的対応という面が強く、その流麗な文章も必ずしも現実を描写したものではないという批判が、戦後は起きることになった。なお『市民社会』では《第四身分》が取り上げられ、併せて《プロレタリアート》の語がもちいられるが、プロレタリアートを話題にするのは1840年のローベルト・フォン・モール、次いで1847年のマルクスとエンゲルスであることから、1851年にそれを論じたのは驚くべき開明性と映るかもしれないが、その中身は微妙である、とバウジンガーは論を繰り広げる。

p. 138 **カール・ヤントケ**（Carl Jantke 1909–89）　バルト海に近いエルビング（Elbing 現・ポ：Elbląg）に生まれ、ハムブルクに没した社会学者・社会史家。ハムブルク大学で経済学と国家学を学び、プロイセン東部の地主貴族の研究で1934年に学位を得た。翌年ケーニヒスベルク大学の助手となり1939年に「フリードリヒ大王とゲーテの国家観念」の研究で教授資格を得た。第二次世界大戦後はドルトムントのミュンスター大学社会研究所でソーシャルグラフィーを手掛け、1953年にヘルムート・シェルスキーの後任としてハムブルク大学の社会学の教授となった。1957年からは「社会学の方法による経済・社会史」を主宰して、1974年に定年となった。

p. 138 **ディートリヒ・ヒルガー**（Dietrich Ortwin Hilger 1926–1980）　ブレスラウ（シレジア、現ポ：ブンツラウ）に生まれ、ハムブルクに没した社会史家。上記のヤントケが編成したハムブルク大学の「社会学の方法による経済・社会史」を教授として担当した。

p. 138 **ローベルト・フォン・モール**（Robert von Mohl 1799–1875）　シュトゥットガルトに生まれ、ベルリンに没した法学者・政治家。ハイデルベルク、ゲッティンゲン、テュービンゲンの諸大学で法学と政治学を学んだ。1824年にテュービンゲン大学の法学の員外教授、1827年に正教授となり1846年までそのポストであった。1848年にフランフルト国民議会の代議員となり、憲法草案委員会委員、臨時政府の

法務大臣を務めた。以後、1857年からはバーデン大公国上院議員、また成立直後のドイツ帝国ではバーデン2区から帝国議会議員となった。当時の国家学の代表的学究であり、明治期の日本にも影響をあたえた。

p. 138 **ヴィルヘルム・ヴォルフ**（Wilhelm Wolff 1809–64）　プロイセン王国時代のシレジアのタルナウ（Tarnau / *Schweidnitz* 現ポ Żarów / Świdnica）に生まれ、英マンチェスターに没したジャーナリスト・革命家。シレジアの下層農家に生まれ、ベルリン大学で古典文献学を学んだが、学業を放棄してジャーナリストとなった。下層民衆の窮状を訴えて、度々収監された。1846年に亡命してロンドンへ、次いでブリュッセルへ移り、同地でカール・マルクスとフリードリヒ・エンゲルスに会った。共産主義の広布のための結社を創設し、1847年にカール・シャッパーが主導する「共産主義者同盟」の結成にマルクス、エンゲルスと共に参加した。翌年、マルクスがシャッパーと決別するとマルクスの側に立ち、終生、その姿勢を貫いて共産主義運動に挺身した。マルクスの『資本論』第一巻（1867年）は数年前に亡くなっていたヴォルフに捧げられた。ここで言及されるシレジアの織工の窮状と一揆の記録に依拠して後にゲルハルト・ハウプトマンの戯曲『織工たち』が成り立った（Gerhard Hauptmann, *Die Weber*. 1892年の公演禁止の後1893年2月26日にベルリンで初演）。

p. 138 **フランツ・フォン・バーダー**（Benedict Franz Xaver Baader 1765–1841）　ミュンヒェンに生まれ没した自然科学者。カトリック神学理論家。はじめ父親や兄と同じく医師を目指したが、鉱物学に転じて学位を得た。鉱山技師として勤務し、その後バイエルン王国の鉱山関係の顧問官となった。1792年に成型炸薬効果を世界で初めて論じた。その年にシェリングの理論に接して独自な国家・社会理論の端緒を得た。また板ガラスの製造に因んで炭酸カリウムの代わりに硫酸ナトリウムをもちいるガラス溶解方法を開発した。ナポレオン後のヨーロッパの復興はキリスト教を柱とすべきことを説き、またプロレタリアートの擡頭とその境遇を憂慮して、プロレタリアートのオーガニゼーションを促すなど社会改良家の一人なった。

p. 138 **イェレミーアス・ゴットヘルフ**（Jeremias Gotthelf 1797–1854）　スイスのエムメン谷ウッツェンドルフ（Utzendorf / Emmental）に生まれ、同谷リュッツェルフリュー（Lützelflüh）に没した牧師・作家。本名はアルベルト・ビツィウス（Albert Bitzius）。牧師の息子として生まれ、ベルンの神学大学で学業を終え、さらにゲッティンゲンでも一年間学んだ。1831年にリュッツェルフリュー教区の副牧師、翌年牧師となった。ペスタロッチの教育理論に沿って教区民の子弟全員の教育に邁進し、また貧困問題などで行政当局とは折り合わなかった。農村に取材した小説作品を手がけ、その最高峰とされる。

p. 138 **フリードリヒ・ハルコルト**（Friedrich Wilhelm Harkort 1793–1880）　ハーゲン市域ヴェスターバウア（Westerbauer bei Haspe / Hagen *NRW*）に生まれ、ドルトムント市域ホームブルッフ（Hombruch / Dortmund *NRW*）に没した実業家・政治家。ルール地方の鉄製品製造会社の家に生まれた。ハーゲンの実業学校を卒業し、対ナポレオン解放戦争への従軍の後、機械製造の世界に入った。鉄道建設による地域の発展を説き、1828年にイギリスの技術を導入して錬鉄製造を進め、ドイツ語圏で最初に鉄道レールを製造した。1824年にイギリスの技師パーマー（Henry Robinson Palmer 1795–1844）がモノレールを考案するや、1826年に自社で試作するなど先駆的であった。同時に、労働者の労働・生活・社会的地位の向上による文明の進歩を説いた社会改良家であった。1830年にヴェストファーレンの地方議会議員、1848年にプロイセン国民議会議員となりハルコルト・フラクションを率いた。1850年にはフランクフルト国民議会後の自主議会エルフルト・ユニオンのメンバーであった。1867年からはドイツ帝国議会の前身議会の代議士となった。その社会政策の考え方は1848年の革命の経験によって深められ、労働者の地位と賃金の安定・教養の向上など具体的であり、ドイツ帝国の政策にも反映された。《ルールの父》（Vater des Ruhrgebiets）と称えられる。

p. 139 **ヴィルヘルム・ヴァイトリング**（Wilhelm Weitling 1808–71）　マグデブルク（Magdeburg）で生まれ、ニューヨークに没したドイツの初期社会主義者でプロレタリアート運動の初期の指導者。仕立職人としてドイツ各地を遍歴の後、1835年パリへ出て、同地のドイツ人亡命者の「義人同盟」（Bund der Gerechten）に参加した。1838年に著した『人類、その現状と理想像』（*Die Menschheit, wie sie ist und wie sie sein sollte*）と1842年の『調和と自由の保障』（*Garantien der Harmonie und Freiheit*）は同盟の綱領文書となった。聖書に記された《新しきエルサレム》を目指し、私有財産と金銭を汚職・搾取の原因として非難し、自らを《社会的ルター》に比定したのには、私有財産を否定し革命を説いた先駆者バブーフ

（François Noël Babeuf 1760–97）の影響を受けた面がある。労働者による即刻の蜂起を提唱したが、それに対して、同盟の一部が1839年のオーギュスト・ブランキの蜂起に参加して失敗した経験から革命は時期尚早と見る同盟内の指導者カール・シャッパー（Karl Schapper 1812–70）との間で1845年に論争となった。後者は1847年にマルクスとエンゲルスと共に「共産主義者同盟」を結成した。その後スイスで活動し，スイス官憲に捕えられ，追放された。1848年の三月革命ではドイツ各地で活動したが，翌年アメリカに亡命し「共産村」の建設を試みて失敗した。空想的社会主義のドイツにおける代表的存在とみられる。

p. 139 **ルードルフ・ブラウン**（Rudolf Braun 1930–2012）　スイスのバーゼルに生まれ没した歴史学者・民俗学者。フライブルク（i.Br.）、バーゼル、チューリヒの諸大学で歴史学と民俗学を学び、1960年に「19,20世紀における村落部の工業社会の文化変容」の研究によりチューリヒ大学で学位を得た。ドルトムントで学術助手、次いで米シカゴで研究員を経て、1964年にベルリン自由大学（FU）で教授資格を得た。以後、外国人労働者の研究にも取り組んだ。1966年に FU の講師、1968–71年には正教授として社会史・経済史を担当した後、1971年からチューリヒ大学においてスイス近・現代史の正教授を務めて1995年に定年となった。バーゼル大学のマットミュラー（Markus Theodor Mattmüller 1928–2003）、ベルン大学のグルンター（Erich Kurt Paul Gruner 1915–2001）と共にドイツ系スイスの社会史研究の開拓者であった。

p. 139 **イェロー・ムーヴメント**（労使協調路線の運動 gelbe Bewegung）　1899年に仏東部ブルゴーニュ地方ル・クルーゾ（Le Creusot）の製鉄所数か所のストライキ中に、闘争を指導する過激なサンディカリストに対して、企業との一定の協調を選択する対抗勢力が労働組合の中に生まれ、仏のカトリック教会が背景であった。イェローの名称は、関係者が黄色の房飾りを付けたことに因むなどの説がある。ドイツに波及したのは1905年で、ベルリンのジーメンス社やアウクスブルクの金属工場に根付いた。その後、第一次世界大戦末の1918年に有力な企業と労働組合の間でいわゆる「シュティンネス=レギエン協定」（Stinnes-Legien-Abkommen）が結ばれた（フーゴ・シュティンネス［Hugo Stinnes 1870–1924］は商工業・メディア産業を率いたコングロマリットの総帥・政治家、カール・レギエン［Carl Rudolf Legien 1861–1920］は金属労組に立脚した全ドイツ労組聯盟議長・国会議員）。ストライキを否定し、企業レーテ（合同会議）による運営を基本として、その後のドイツの労使関係を方向づけた。

p. 139 **アルフレート・クルップ**（Alfred Krupp 1812–87）　ライン河畔エッセンに生まれ没した実業家。失意のうちに病死した父親の後を14歳で継ぎ、負債を抱えた零細な町工場の立て直しを図った。父親が始めていた（イギリスに匹敵する）高品質の錬鉄づくりに取り組んで成功させたが、製品は売れず、当初はスプーンやフォークをつくっていた。やがて鉄道の時代の到来を予見して世界ではじめて鉄道車輪の一体成型を実現させ（それまでは半円の溶接）、鉄道車輪を自社のロゴマークとした。また第一回ロンドン万博に六ポンド野戦砲を出品して金賞を得るなど、新兵器の開発がもとめられる時代潮流を読み、クルップ社を世界最大規模の鉄道関聯と兵器製造等のコングロマリットに成長させた。労働者は自分の家族と同じという信念の持ち主で、そのため裏切られた思いをもつことも多く、その生涯は数々のエピソードで彩られている。

p. 140 **パン騒動**（Brotkrawall）　1840年代後半はジャガイモ飢饉に加えて小麦の収穫も減少した。そのためパン価格が高騰した。ただし《ウルムのパン騒動》としてよく知られているのは、1847年 5 月 1 日に起きた事件で、値段を釣り上げて売り惜しむパン屋と小麦商店を女性たちが襲って店舗を破壊して商品を強奪し、事後数人の逮捕者が出た。同じ時期にはシュトゥットガルトでも女性たちが穀物商店を襲った。バウジンガーは、この一年後の革命の最中に地域では労働者たちが工場と経営者を守る姿勢とをとったことに注目している。

p. 141 **ヘルベルト・フロイデンタール**（Herbert Freudenthal 1894–1975）　ハムブルクに生まれ、リューベックに没した民俗学者。第一次世界大戦に義勇兵として出征して叙勲され、復員後、ハムブルク大学で教育学・歴史学・民俗学を学び、1927年に火をめぐる俗信・迷信の研究で学位を得た（1931年刊）。ナチスの積極的なメンバーとしてキャリアを重ねたために、戦後は批判を受けた。それからの脱皮の意図もこめて、ゲオルク・ジムメルの理論に沿う形でハムブルクの多種多様なフェルアインの歴史と実態調査に即した研究を進め、その成果は、フェルアイン（アソシエーション）研究の定礎的意義と文献調査による資料的価値がみとめられてきた。

p. 141 **シラー・フェスティヴァル**（Schiller-Feier）　ドイツ古典文藝の雄としてゲーテとシラーが並び称されるが、19世紀後半の国民国家の成立過程と成立の初期にはシラーは最高の国民的詩人として多数の記念碑と記念祭で彩られた。《シラーの作品は動詞だけでできている》と言われるほど語法がダイミックであるのも事実だが、高揚した時代潮流と合った面がある。

p. 141 **ヴェルナー・コンツェ**（Werner Conze 1910–86）　エルベ河畔ノイハウス（Neuhaus / Kreis Bleckede *NI*）に生まれ、ハイデルベルクに没した歴史学者。ライプツィヒ大学とマールブルク大学を経てケーニヒスベルク大学で美術史・歴史学・社会学・スラヴ学を学んだ。ケーニヒスベルク大学において、1934年に学位を、1940年に教授資格を得た（リトアニア大公国の農地制度の研究）。第二次世界大戦終結までは軍務期間が長かった。その研究にはフェルキッシュ思想によるドイツ・ナショナリズム色が強く、戦後も評価に影響した。戦後はゲッティンゲン大学の無給講師、ミュンスター大学の員外教授を経て、1957年にハイデルベルク大学教授となった。また研究方法を政治史から社会史へ転換し、そのリーダーとして日本を含む諸外国にも影響を及ぼした。

p. 141 **ディーター・グロー**（Dieter Groh 1932–2012）　フランクフルト・アム・マインに生まれ、ハイデルベルクに没した歴史学者。ハイデルベルク大学とパリ大学において法学・歴史学・哲学・スラヴ学を学び、1959年にハイデルベルク大学において学位を得た。その後、同大学の社会・経済史研究所において歴史学者ヴェルナー・コンツェ（Werner Conze）の下で助手を務め、1970年に教授資格を得た。1974年にコンスタンツ大学の近代史の教授となり、1997年に定年退官となった。19世紀のドイツ史に厚く、労働運動についてソーシャルナショナリズムの面から再検討を行なった。

p. 141 **カール・マルクス**（Karl Marx 1818–83）　トリーア（*RP*）に生まれ、ロンドンに没したユダヤ人の経済学者・社会運動家。

p. 141 **フリードリヒ・エンゲルス**（Friedrich Engels 1820–95）　ライン地方（現在はヴッパータール市域）バルメン（Barmen / Wuppertal*NRW*）に生まれ、ロンドンに没した社会思想家。マルクスと共に社会主義思想を構築した。

p. 142 **ジョン・ゴールドソープ**（John Harry Goldthorpe 1935–L）　サウス・ヨークシャーのグレイト・ホートン（Great Houghton）に生まれたイギリスの社会学者。オックスフォード大学教授を務めた。社会流動性（social mobility）の観点を取り入れつつ、サービス階級・中間階級・労働階級の 3 つに大別された11の階級に基づく「ゴールドソープ階級図式」を提示した。

p. 142 **デイヴィッド・ロックウッド**（David Lockwood 1929–2014）　西ヨークシャー、ホルムファース（Holmfirth）に生まれたイギリスの社会学者。ケムブリッジ大学とエセックス大学で教授を務めた。ホワイトカラーについて、中流化よりも、プロレタリアート化の傾向が優勢であることを論じた。

p. 143 **ザンクト=パウリ・スポーツ組合**（Sankt Pauli Sportsverein）ハムブルクのザンクト・パウリ地区に本拠を置くスポーツ団体「FC ザンクト・パウリ」（Fußball-Club St. Pauli von 1910 e. V. 略称 FC St. Pauli）を指す。フットボール（＝サッカー）を団体名に冠しているが、他にも土地柄のヨット、またラグビーや視覚障碍者サッカーなど20部門以上を擁する巨大組織で、会員は約 3 万 5 千人。特にサッカーでは、ハムブルクを拠点とする巨大スポーツ組合「ハムブルガーSV」（Hamburger Sport-Verein e. V. 略称 HSV）と双璧で、両者の対決は《ハムブルク・ダービー》と呼ばれる。団体名からも知られるようにオフィシャルには1910年が創設年とされるが、1924年のドイツ全土での体操（Turn/Turnen）と近代スポーツのいわゆる《清廉訣別》（reinliche Scheidung, 1923/24）までは「ハムブルク＝ザンクト・パウリ体操組合」（Hamburg- St. Pauli Turnverein 1862 e. V. 略称 St. Pauli TV）のサッカー部門であった。なお後者は、1852年に結成されたハムブルクにおける「男子体操組合」（Männer-Turnverein: MTV）と1860年に結成された「ザンクト・パウリ & フォア・デム・ダムトーレ［＝ハムブルク新旧市街地境界ダムトーア付近の地名］体操組合」（TV in St. Pauli und vor dem Dammthore）が融合して成立した。ここで言及される「ザンクト=パウリ・スポーツ組合、これさえあれば！」（*Sankt Pauli Sportsverein genügt vollkommen!*）は応援歌。

p. 143 **クリストーフ・トリュムピ**（Christoph Trümpi 1739–81）　スイスのグラールス州ニーダーウルネン（Niederurnen Kt: Glarus）に生まれ、同州シュヴァンデン（Schwanden）に没した牧師。市参事会員の家に生まれ、チューリヒの「カール［大帝］神学院」（Collegium Carolinum チューリヒ大学の前身）に学んだ。1757年にシュヴァンで副牧師となって聖職者の道に就いた。1771年に町村から采邑権をあたえ

られ、1777年に教会参事会員に選ばれ、また法官を兼ねた。1768年以来、啓蒙主義者ラーヴァター（Johann Caspar Lavater 1741–1801）と書簡を交わした。1774年に『新グラールス年代記』（*Neuere Glarner-Chronick*）を上梓した。初期啓蒙主義者で聖職者として先人であったチュディ（Johann Heinrich Tschudi 1670–1729）の『グラールス年代記』（*Beschreibung des Lobl. Orths und Lands Glarus*）の続編という趣旨だったらしい。総じて保守思想と楽観的な視点がバランスをとっている、とされる。

p. 143 **フリードリヒ=ヴィルヘルム４世**（Friedrich Wilhelm IV. von Preußen 1795–1861, 在位1840–61）　プロイセン王。

p. 144 **ラッサール派**（Lassallianer）　フェルディナント・ラッサールは労働者政党の設立を企画し、前年から準備を重ねて、1863年５月23日にライプツィヒにおいて「全ドイツ労働者協会」（Allgemeiner Deutscher Arbeiterverein: ADAV）の設立を実現させて、会長に就いた。ラッサールの死後、1875年にはマルクス系の「ドイツ労働者協会連盟」（アイゼナッハ派）との合同により「ドイツ社会主義労働者党」（Sozialistische Arbeiterpartei Deutschlands: SAPD）が発足し、同党は1890年に「ドイツ社会民主党」（Sozialdemokratische Partei Deutschlands: SPD）となって今日に至る。

p. 144 **アイゼナッハ派**（Eisenacher）　アウグスト・ベーベルとヴィルヘルム・リープクネヒトの指導の下に「社会民主労働者党」（Sozialdemokratische Arbeiterpartei: SDAP）が1869年８月８日にテューリンゲン州の古都アイゼナッハにおいて発足した。同党は、マルクスとエンゲルスによる「第一インターナショナル綱領」（1866年採択）を指導理念とし、最終的には労働者の賃労働者としての性格を廃絶する生産様式の変革を目指すことを謳った点で、現実の工場経営を前提とするラッサールが基礎を据えた「全ドイツ労働者協会」とは原理的に異なっていた。しかしパリ・コミューンをはさんで社会主義者の分裂が続くなかで、1875年にラッサール派との合同が成り立った。それにあたってラッサール派の考え方が多く盛り込まれた「ゴータ綱領」が採択され、マルクスによって批判された。しかし党運営では、次第にベーベルとリープクネヒトが主導権を持つようになった。

p. 144 **社会主義者鎮圧法**（Gesetz gegen die gemeingefährlichen Bestrebungen der Sozialdemokratie: 略称 Sozialistengesetz）　２度の皇帝狙撃事件をきっかけに、ドイツ帝国宰相オットー・フォン・ビスマルクの主導で1878年に制定された。主に「ドイツ社会主義労働者党」（後の「ドイツ社会民主党」）をターゲットにして、社会主義的な結社を禁止し、集会・出版を制限した。やがて、ビスマルクを引退させた後、政治路線で独自色を出そうとした皇帝ヴィルヘルム２世が更新に反対して1890年に廃止された。

p. 144 **フェルディナント・ラッサール**（Ferdinand Johann Gottlieb Lassalle 1825–64）　プロイセン王国時代のシレジアのブレスラウ（現ポ・ブロツワフ）に生まれ、スイスのジュネーヴ州カルージュ（Carouge）に没した社会主義政治家。裕福なユダヤ人絹商人の家に生まれ、ブレウラウ大学とベルリン大学に学んでヘーゲル哲学への関心を強めた。早くからハイネやベルネの作品に親しんで革命思想に惹かれた。1846年から54年にかけてハッツフェルト伯爵夫人の離婚訴訟を代行し、それが反封建主義運動と解されて広く人気を得た。1848年革命ではマルクスとも共同して革命を指導し、逮捕収監された。以後マルクスとの関係は、接近と乖離を重ねつつ両者の立場の違いが大きくなった。しばらく理論書と文藝作品に打ち込んだ後、1861年から社会主義者として政治的活動を再開したが、ヘーゲル的な国家観からビスマルクとの協調の姿勢をとることができ、また生来、貴顕サークルとの交際を好むところがあり、貴族女性との婚約をめぐる悶着の中、決闘で銃撃を受けて亡くなった。後継者たちによって1875年に今日につながる「ドイツ社会民主党」（SPD）が結成された。

p. 145 **オットー・リューブ**（Otto Lüb 生1924）　フランクフルト・アム・マインに生まれた合唱団指揮者。はじめ実科学校のコースを歩み、1942年に兵役に就いてフランス、ロシア、ルーマニアで勤務し、1945年にウィーン=ノイシュタット士官学校に入り、終戦により1945年に少尉として退役した。戦後はしばらくフランクフルト市役所に勤めた。1946年からフランクフルト市のギムナジウム夜間部に通い、1949年に卒業資格（アビトゥア）を得た。同年、フランクフルト大学に入学し、1964年に原注に挙げられる合唱団の研究によって学位を得た。並行して、1948年から52年まで「ヴィースバーデン音楽学校」に通い、1950年に「フランクフルト男女児童混声合唱団」の団長となり、特に教会声楽の指揮を担当した。経歴からは、合唱団団長としての職務のかたわら、フランクフルト市圏の合唱団の歴史研究に取り組んだことが判明する。

p. 145「**ラッサリア**」（Lassallia）　以下、原語を挙げる：「**喜び**」（Fröhlichkeit）、「**兄弟のきずな**」

（Bruderkette）、「**くつろぎ**」（Gemütlichkeit）、「**アルプスの薔薇**」（Alpenröschet これは直訳で、アルプスシャクナゲを指す）。これらの名称からは、市民層の心理トレンドと変わらないことがうかがえる。

p. 145「**歌の共同体**」（Liedergemeinschaft）　労働者歌唱団体の連合組織は、すでに1877年にゴータにおいて結成され後の同名の組織と区別して「［第一］ドイツ労働者歌唱同盟」（der [Erste] Deutsche Arbeiter-Sängerbund）と呼ばれる。しかし「社会主義者鎮圧法」の1878–90年間は、まとまりが難しかった。同法廃止から2年後の1892年に準備的な「歌の共同体」がつくられ、自前の楽譜の印刷などへ進んだ。これを元に1907年（1908年とも）に「ドイツ労働者歌唱同盟」（Deutscher Arbeiter-Sängerbund: DAS [DASB]）が結成され、この時点で傘下のメンバーは55,000人を数えた。以後の展開では、1920年代には225,000人に達した。これは労働者の教養団体としては「労働者体操スポーツ同盟」（Arbeiter-Turn- und Sportbund: ATSB）が1926年の最盛期に125万人、「自転車スポーツ《団結》」（RKB Solidarität Deutschland 1896 e. V.）が1925–26年の最盛期に30万人に次ぐ三番目に大きな連合組織であった。

p. 145 **ギーゼラ・ヤークス**（Gisela Jaacks 1944–L）　ロストックに近いギュストロー（Güstrow*MV*）に生まれた女性民俗学者。ハムブルク大学で上古学・歴史学・ゲルマニスティク・美術史・音楽論・演劇学を学び、1971年にリューベックの民衆祭・追憶祭の研究で学位を得た。ハムブルク歴史博物館に勤務し、1993年に副館長、2002年に館長となり、2008年に定年となった。ハムブルクの祭り行事の他、音楽と演劇に関する著作もある。

p. 145 **ヴィルヘルム・リープクネヒト**（Wilhelm Liebknecht 1826–1900）　ヘッセン大公国時代のギーセン（Gießen*HE*）に生まれ、ベルリン郊外シャルロッテンンブルク（Charlottenburg）に没した社会民主主義の政治家。官吏の息子であったが、両親に死に別れ、育ててくれた叔父が反乱の咎で自殺したといった経験があり早くから社会正義に目覚めた。ギーセン大学とベルリン大学で言語学と哲学を学んだが社会主義の活動のゆえに追放された。1848年革命のバーデン一揆で投獄され、次いでスイスから追放され、ロンドンでマルクスとエンゲルスに会って同志となった。1862年に帰国して社会主義のリーダーとして活動し、1867年から1870年までプロイセン、1874年までドイツ帝国の国会議員であった。1869年のアイゼナッハでの労働組合大会において「社会民主労働党」の決定を実現させた。1875年の社会民主党の結成に対してマルクスから批判されたが、基本的にマルクスの誠実な弟子であった。

p. 146 **エードゥアルト・ベルンシュタイン**（Eduard Bernstein 1850–1932）　ベルリンに生まれ没した社会民主主義の政治家。リープクネヒトの協力者として、ドイツ社会民主党の結成に尽力した。後に、中間層の増大の意義を直視して革命を否定した。そのため修正主義の代表者とみなされたが、労働者の市民化の趨勢を見通していた面があり、今日のドイツ社会民主党の路線を敷いたとして評価は高い。

p. 146 **ヴィルヘルム・ブロメ**（Wilhelm Bromme 1873–1926）　ライプツィヒに生まれ、リューベックに没した社会民主党の活動家・リューベック市会議員。鉄道員の息子として生まれたが、父親が怪我を負ってスリッパ製造の工場労働者に転じた関係から、ボタン・靴・木製品・機械会社でスリッパ作りに従事し、1898年に労働組合「ドイツ木製品労働者同盟」（Deutscher Holzarbeiterbund 1893年創設）に入った。それに先立って1891年に社会民主党ドルトムント支部に入っており、1896年には執行部のメンバーとなっていた。結核を患って転職を図り、一時、足袋作りの自主工場にたずさわった。1906年に社会民主党の学校で勉学を励み、特にルードルフ・ヒルファディング、フランツ・メーリング、ハインリヒ・シュルツ、フーゴ・ハイネンなど名だたる理論家から教えを受けた。生活協同組合にもかかわるようになり、社会民主党員としてはリューベックの組織で次第に重みをもち、第一次世界大戦末期のリューベック市基本法の改正では審議委員を務め、戦後は市会議員となった。その姿勢からコミュニストの攻撃の対象ともなったが、1925年に健康を害して引退した。1905年に前半生の自伝を刊行しており、ここでの文脈でもそれが出典となっている。

p. 147 **ロビン・M・ウィリアムズ**（Robin Murphy Williams, Jr. 1914–2006）　米ノースカロライナ州ヒルズボロー（Hillsborough）に生まれ、加州アーバイン（Irvine）に没したアメリカの社会学者。ノースカロライナ州立大学で学んだ後、ハーヴァード大学で1939年にM.A.、1943年にPh.D.を得た。1946年から1985年までコーネル大学の社会学の教授であった。社会の中の《インターグループ》とその意識を研究対象とし、初期には軍隊の兵士、次いで大学生の間で調査を行ない、やがてアメリカ社会における種々の（人種を含む）集団形成と軋轢を研究対象とした。インターグループを逆照射した『見知らぬ隣人』（*Strangers Next Door*. 1964）もよく知られている。

p. 147 **アレクサンドリアのアポローニア**（Apollonia von Alexandria ?–249）　初期キリスト教時代の伝説的な殉教者。アレクサンドリアの行政官の娘で、信仰をまもって火刑を選んだとされる。また歯痛を和らげてくれる聖者として広く崇められてきた。例祭日は2月9日。

p. 147 **クラーラ・ツェトキン**（Clara Zetkin［旧姓 Eißner］1857–1933）　ドレスデン近郊のヴィーデラウ村（Wiederau*SN*）に生まれ、モスクワに没したフェミズム運動の指導者。教員を目指す過程で労働運動にかかわり、「ドイツ社会主義労働者党」（Sozialistische Arbeiterpartei Deutschlands, SAPD）に入った。ビスマルクの社会主義者鎮圧法下でパリへ亡命し、同地でオデッサ出身のロシアの革命家オシップ・ツェトキン（Ossip Zetkin [Осип Цеткин] 1850–89）と暮らしを共にし、以後ツェトキンを名乗った。1875年に諸団体が合同して結成された「ドイツ社会民主党」内ではベルンシュタインの修正主義に反対する左派に属した。女性解放運動を牽引し、党婦人部長にも就いた。第一次世界大戦が始まると党指導部の戦争協力姿勢に抵抗して、カール・リープクネヒトやローザ・ルクセンブルク等と共に左派の立場に立ち、やがて「スパルタクス団」を結成した。1920年の「ドイツ共産党」の結成に参加し、帝国議会議員のポストを占めつつ、党中央委員およびコミンテルン代表委員を務めた。1933年のヒトラーの政権掌握と国会議事堂放火事件を口実にしたドイツ共産党の非合法化の下、モスクワへ亡命し、同年客死した。

p. 147 **ヴィルヘルム・ルートヴィヒ・ローゼンベルク**［ウィリアム・ラドウィッグ・ローゼンバーグ］（Wilhelm Ludwig Rosenberg 1850–1930s）　北ライン地方のハム（Hamm*NRW*）に生まれ、おそらく米オハイオ州ロッキー・リヴァー（Rocky River）の娘夫妻のもとで没したドイツ人の詩人・劇作家・ジャーナリスト・アメリカの社会主義活動家。大学教育を受け、フランクフルト（M）でラテン語とフランス語の教師となり、またラディカルな社会主義者であった。1880年にアメリカへ渡り、ボストンを経て、シカゴを拠点に「社会主義労働者党」（Socialist Labor Party: SLP）の活動家となり、機関誌・紙の発行にも勤しんだ。1890年代半ばにオハイオ州シンシナッティへ移った。喜劇『選挙戦を前にして』（*Vor der Wahlschlacht*）は1887年にシカゴで初演された。

p. 148 **アウグスト・カッペル**（August Kappell 1844–1922）　ベルリンに生まれ、ハムブルクに没した社会民主主義者・労働運動指導者。はじめ大工の修行をし、やがてラッサールによって設立された「全ドイツ労働者協会」（ADAV）の過激な宣伝家となった。なおカッペルの基盤は大工組合、また地域的にはハムブルクのアルトナであった。ファナティックであったため、同じ社会民主党のアウグスト・ベーベルは、帝国議会選挙ではカッペルよりも保守系候補が当選する方がベターと判断をしたくらいであった。政治活動のかたわら、ハムブルクで小規模なビール会社と飲食店を経営した。なおここで言及される『**ドクター・マックス・ヒルシュクーあるいは偽善者の作業センター**』（*Dr. Max Hirschkuh oder das Amt des Heuchlers*）はカッペルによる政治性の強い演劇で1872年に初演された。攻撃対象のマックス・ヒルシュ（Max Hirsch 1832–1905）はハルバーシュタット（Halberstadt *ST*）に生まれ、保養地バート・ホムブルク・フォア・デア・ヘーエ（Bad Homburg vor der Höhe *HE*）に没した出版業の実業家でユダヤ人であった。ヒルシュは政治的には「進歩党」に属し、また早くから労働者教養クラブを設立して労働者の知識向上を図り、さらに1868年に出版業ドゥンカー社主フランツ・ドゥンカー（Franz Gustav Duncker 1822–88）及び「信用共同組合」の創設者フランツ・ヘルマン・シュルツェ=デーリチュ（Franz Hermann Schulze-Delitzsch 1808–83）と共に自由主義的な労働組合を設立して、社会主義・社会民主主義の労働組合ともキリスト教会主導の労働組合とも異なる路線を模索した。カッペルはそれを攻撃し、そのさい姓のヒルシュ（鹿の意）をヒルシュクー（雌鹿）と揶揄したのは、闘う角を持たないことへの当てこすりで、またユダヤ人への反感の要素をも取り入れることも辞さなかった。

p. 148「**アンドレーアス・ホーファー行進曲**」（Andreas-Hofer-Marsch 1767–1810）　アンドレーアス・ホーファー（1767–1810）はナポレオンのオーストリア侵攻に対して立ち上がった義勇軍の指導者でヴェネチアで処刑された。チロール地方の国民的英雄として今も人気が高い。その名前を冠した行進曲は、詩人ユーリウス・モーゼン（Julius Mosen 1803–67）が1831年に詠んだ歌詞に、作曲家レーオポルト・クネーベルスベルガー（Leopold Knebelsberger 1814–69）が1844年に曲を付けた。永く人気があり、1948年には墺チロール州のオフィシャルな頌歌に格上げされた。

p. 148 **フロトー**（Friedrich von Flotow 1812–1883）　フリードリヒ・フォン・フロトーはメクレンブルクのトイテンドルフ（Teutendorf：今日はザーニッツ市 Sanitz 東域 *MV*）で生まれ、ダルムシュタットに没したオペラ作曲家。生家は由緒のある地主貴族で代々プロイセン王国の高級官僚を輩出し、また父母と

もに音楽の素養をもっていた。生家の期待に応えて外交官のコースを歩んだが、パリで音楽家を志向してクラリネットとピアノを習得し、また「パリ音楽院」で作曲を学んだ。パリでは特にシャルル・グノーとジャック・オッフェンバックと親交を結んだ。作曲の分野は多彩ながらオペラを本領とし、ドイツ・ロマン派音楽のなかでも大衆的要素に持ち味がある。『**マルタ**』、正式には『マルタあるいはリッチモンドの市場』（*Martha oder Der Markt zu Richmond*）は代表作。宮廷の女官が、退屈しのぎに身分をいつわって農家に雇われ、その農家の主の義弟に求婚され、当惑しつつも宮廷へ逃げ帰るが、その男は貴族の遺児であったことが判明して、二人は結ばれるという筋である。ここで言われるのは、「序曲」だけでなく全編を通じて中心的な位置を占めるアイルランド民謡「夏の名残の薔薇」（日本では「庭の千草」として知られる）であろう。この他にも、幾つかの親しみやすい旋律が盛り込まれている。

p. 148 **トレンド合唱曲**（傾向合唱曲 Tendenzchor/-chöre）特定の思想や理念を謳う作品を指す。ここでは労働運動との関係で言われる。

p. 148 **ハインリヒ・ハイネ**（Heinrich Heine 1797–1856）　ライン河畔デュッセルドルフに生まれ、パリに没したドイツの詩人・ユダヤ人。ゲッティンゲン大学で法学を学び、商人を目指すも、文藝活動に転じた。ベルリン大学でヘーゲルから教わり、またグリム兄弟とも面識をもった。社会批判の文筆の故に官憲の監視を受け、1831年にパリへ移った。1843–45年間にパリでカール・マルクスと親交をもった。そうした経緯から社会主義の側から好まれた面があるが、基本はハイネの詩歌は思想傾向に拘わらず近代の人間の心情と呼応するところがあり、またそれがハイネ詩歌の持ち味であった。

p. 148 **ルートヴィヒ・ウーラント**（Ludwig Uhland 1787–1862）　テュービンゲンに生まれ没した詩人・文藝学者・法曹家・政治家。テュービンゲン大学に学び、1810年に法学で学位を得た。官庁勤務を経て1819年にヴュルテムベルク王国の国会議員となり1826年まで務めた。1829年にテュービンゲン大学の国語国文藝の教授となったが、1832年に再び国会議員となり1838年まで議席を有するも、両立に苦しんで大学を辞した。1848年のフランクフルト国民議会では代議員となった。後半生は民間の学者として中世ドイツ文藝の研究を進め、同時代のグリム兄弟やカール・ラッハマンと並行する分野の開拓者であった。またテュービンゲン大学の学生時代の1805–08年にユスティヌス・ケルナー（Justinus Kerner 1786–1862）やカール・マイヤー（Karl Mayer 1786–1870）と共に文藝集団をつくった。そのゆるやかな文壇はシュヴァーベン詩派（Schwäbische Dichterschule）と呼ばれ、早くからの知己グスタフ・シュヴァープ（Gustav Schwab 1792–1850）の他、エードゥアルト・メーリケ（Eduard Mörike 1804–75）やヴィルヘルム・ハウフ（Wilhelm Hauff 1802–27）も含まれる。

p. 148 **ヴェンデリーン・ヴァイスハイマー**（Wendelin Weißheimer 1838–1910）　ヴォルムスに近いオストホーフェン（Osthofen*RP* 当時はダルムシュタット=ヘッセン大公国の域内）に生まれ、ニュルンベルクに没した作曲家。生家は多角経営を行なう豪農で、父親は領邦等族議会に議席をもっていた。ダルムシュタットの実科学校において音楽を志し、1856年から「ライプツィヒ音楽院」で学び、1858年に20歳でマインツの劇場楽団長となった。1860年にヴァイマルへ移ってフランツ・リストに就いて作曲を学び始めた。翌1861年に予て惹かれていたリヒァルト・ヴァーグナーと親交を結び、自作上演の目途が立たず借財をも抱えたヴァーグナーを物心両面で支援して、しばらくオストホーフェンの父親の屋敷で過ごさせた。また1864年 7 月にフェルディナント・ラッサールと会う機会をもち、オストホーフェンの屋敷に招くほど意気投合した。ラッサールはヴァイスハイマーが作曲したオペラ「テードオドル・ケルナー」を誉め、引き続いてフローリアン・ガイアー、トーマス・ミュンツァー、ヤン・ジシュカなどの革命家を主人公にしたオペラの作曲を勧め、自ら台本を書く意向を示したが、同年中にラッサールは死亡した。その後、ヴァイスハイマーはアウクスブルク、ヴュルツブルク、ニュルンベルクにおいて音楽監督を歴任し、またミラノのスカラ座でも指揮者を務めるなど19世紀末の最も著名な音楽監督・指揮者の一人となった。ラッサールとの短期に終わった親交の後も労働者と労働運動の文化的水準を高める情熱をもちつづけ、1920年の葬儀においては、労働組合諸団体が中心になり 3 万人が参列した。オペラ、交響曲、カンタータに加えて、多数の歌曲を作曲した。

p. 149 **グスタフ・アードルフ・ウートマン**（Gustav Adolf Uthmann 1867–1920）　ライン河畔バルメン（Barmen 今日は合併によりヴッパータール市の北東域 *NRW*）に生まれ没した作曲家・合唱団指導者。幼時に父親を亡くし、盲目の母と兄弟姉妹を抱えて少年時から家計を支えるために染織工となったが、弱視の進行のため保険局員に転じた。傍ら音楽の才能を示し、トロンボーンを吹いていたが、支援者を

得てヴァイオリンとピアノを学び、またヴッパータールに居を定めていた作曲家ラウヘェネッカー（Georg Wilhelm Rauchenecker 1844–1906）から作曲の手ほどきを受けた。またその境遇から、早くから労働運動に関心を持った。本職は疾病保険局員で、最後は地域の副局長まで進んだ。1891年から地域の「労働者歌唱クラブ」（Arbeitergesangverein）の合唱団の指導者となった。生涯に400曲の労働運動歌・戦闘歌・平和歌謡を作曲し、1906年には「労働者歌唱クラブ」全国本部執行部の委嘱で「インターナショナル」歌の男声合唱ための編曲を手掛けた。敗血症のため52歳で亡くなり、生地の墓地には高さ6メートルの記念碑が建てられている。

p. 149 **フリードリヒ・ジルヒァー**（Fridrich Silcher 1789–1860）　南西ドイツの小村シュナイト（今日はヴァインシュタット市の市区 Schnait / Weinstadt im Rems-Murr-Kreis*WB*）に生まれ、テュービンゲンに没した作曲家・音楽教育家。ペスタロッチの教育理論に共鳴し、学校の内外で音楽教育を行ない、またアマチュア合唱運動の推進者であった。甘美なメロディーを得意とし、なかでもハイネの詩に曲付けした「ローレライ」は有名である。

p. 149 **アウグスト・ベーベル**（August Bebel 1840–1913）　ケルン近郊ドイツ（Deutz / Koln 現在は市域）に生まれ、スイスの保養地グラウビュンデン州パッスーク（Passugg）に没した社会民主主義の政治家。軍人の家に生まれたが、早く父母を亡くして、旋盤工となった。職人教養組合で果たせなかった学業を補い、青年期から労働運動に入った。ヴィルヘルム・リープクネヒトと共にアイゼナッハ派のリーダーであったが、過激ではなかった。社会民主党創設以来の重鎮として国会議員を務めた。また女性の地位と権利に早くから関心を持ち、フェミニズム運動の側から信頼された。著作に『婦人論』があり、また自伝も重要視される。

p. 149 **ゲルハルト・ハウプトマン**（Gerhard Hauptmann 1862–1946）　上シレジアのオーバー・ザルツブルン（Ober Salzbrunn 現ポ Szczawno-Zdrój）に生まれ、同地方のアグネーテンドルフ（Agnetendorf 現ポ Agnieszków=Jagniątków）に没した劇作家。初期には自然主義的な作風で、代表作『織子たち』（*Die Weber*. 1892）は1844年のシレジアの織布職たちの反乱と鎮圧の経緯に集材する社会性の強い作品であった。並行して、抒情的・瞑想的な作品も多く、『沈鐘』（*Die versunkene Glocke*. 1897）はその代表作である。1912年にノーベル文学賞を受けた。

p. 150 **ケッテラー卿**（Wilhelm Emmanuel Freiherr von Ketteler 1811–77）　ヴェストファーレン地方ミュンスター（Münster i.W.）に生まれ、アルトエッティング郡ブルクハウゼン僧院（Klosterr Burghausen）に没したカトリック教会の聖職者。ヴェストファーレンの中世の皇帝家家人貴族に遡る家系の出自。ゲッティンゲン大学で法学と国家学を学び、ベルリン大学ではサヴィニーの教えを受けた。軍務を経てプロイセンで官途に就いたが、信仰の問題、おそらくプロイセン王国がケルン大司教クレーメンス・アウグスト・フォン・ドロステ=フィシェリング（Clemens August Droste zu Vischering 1773–1845, 1835年以来ケルン大司教）を逮捕監禁した事件を機に神学に転じて1841–43年にミュンヒェン大学で学び、同大学では晩年のヨーゼフ・ゲレス（Joseph [von] Görres 1776–1848）に接した。1844年にミュンスター（i.W.）において司祭となった。赴任した同地方のベックムのザンクト・ステファヌス教会堂（St. Stephanus in Beckum）の次席司祭の職位にあってすでに社会問題への旺盛な発言を始め、1848年革命中のフランクフルト国民議会の代議員となった。ベルリンの助任司教区への赴任を経て、1950年にマインツ司教となった。労働者問題で論陣を張り、またカトリック教会系の教養組合や生産協同組合の結成と活動を推進した。1870年の「中央党」の創設者の一人で、国会議員となり、1871年から77年まで続いたビスマルクによるカトリック教会抑圧に対する文化闘争を指導した。その思想と活動から《労働者の司教》と称される。参照，桜井健吾『労働者の司教ケテラーとその時代 —— 19世紀ドイツの社会問題とカトリック思想』教文館 2019.

p. 150 **回勅「レールム・ノヴァールム（新しき事態について）」**（*Rerum Novarum*）　レオ13世（Leo XIII 1810–1903, 教皇在位1878–1903）によって1891年5月15日に《労働者問題について》と謳って公刊された45項目から成る教皇の公的な所信。社会的矛盾について教会が繰り返していた《貧者は忍耐、富者は慈善》を説く段階を脱して社会問題を構造的に取り上げるための基本的指針を呈示した。労働者の貧困や境遇の改善は（憐れみの対象ではなく）社会正義の問題であるとして《人格の尊厳と基本的人権を認め擁護し愛する》ことを基本として社会的変革をみとめた。それにあたっては共産主義を認めない一方、無制約な資本主義の弊害を問題視し、私有財産を擁護しつつも労働者の労働権を認め、労働組合の

結成を支持して階級協調を説いた。社会問題に関するカトリック教会の「マグナ・カルタ」とも評価され、以後、キリスト教系の政治路線の指針として中道右派や穏健な社会民主主義の背景となった。現代の問題決定方法としての補完性原理（Subsidiaritätsprinzip）もこの回勅に遡るとされる。

p. 150 **回勅「クアドラジェジモ・アンノ（四十年に因んで）」**（*Quadragesimo anno*）　ピウス11世（Pius XI 1857–1939, 教皇在位1922–1939）によって1831年5月15日、すなわち「レールム・ノヴァールム」の40周年に発表されたため、この名称で呼ばれる。124項目から成り、基本的に回勅「レールム・ノヴァールム」を原則とすることが改めて謳われる。資本と労働とは相互依存的で、両者の契約は一般利益に従ってなされるべきとする。私有財産を認めることから労働者は自己とその家族のための財産を所有すべきであり、また経営に参加することも望まれるとし、プロレタリアートの脱プロレタリアート化を説く。職業組織の中では、資本と労働のバランスがもとめられるとする。社会主義については、マルクス主義も社会デモクラシーもカトリック教会とは相容れないとして排斥し、社会主義の放棄を説く。と共に、キリスト教会の精神に沿った穏健な形態となることが望まれるとしている。また《あらゆる社会的活動は、その本質と概念のおもむくところ補完的である》として補完性原理が説かれる。産業社会の現実を踏まえて、社会正義を基本とした資本と労働との関係を説いており、今日に至るまで社会への教会の見解の基本となっている。

p. 151 **『庭のあずまや』**（*Die Gartenlaube – Illustrirtes Familienblatt*）　現代の家庭雑誌のさきがけとして1853年にライプツィヒのエルンスト・カイル社から刊行され、初版は5000部であった。カイル（Ernst Keil 1816–78）は1848年革命の活動家であったため市民権を失っていた時期で、編集はジャーナリストのシュトレ（Ferdinand Stolle 1806–72）が共同で務め、その後カイルが単独で担当した。発行部数は1861年に10万部を超え、1875年には382,000部に達した。社会批判の論調が盛り込まれると共に、家庭向けの教養雑誌の基準的な位置を占め、公共機関にも備えられた。

p. 151 **『我が宿』**（*Daheim: ein deutsches Familienblatt mit Illustrationen*）　1864年にライプツィヒ／ビーレフェルト／（後に）ベルリンに拠点を置く「ヴェルハーゲン & クラージング社」（Velhagen & Klasing）から創刊され1943年まで刊行された家庭雑誌。当初は週刊であったが、後に隔週刊となった。『庭のあずまや』の成功を追って企画され、保守的・キリスト教会的であることを持ち味とした。多くの文人とイラストレーターが巣立った。テーオドル・フォンターネやパウル・ハイゼも寄稿者であった。

p. 151 **カールハインツ・ヴァルラフ**（Karlheinz Wallraf 1914–2004）　学位論文と生没年の確認にとどめる。

p. 151 **E. マルリット**（Eugenie Marlitt［本名 Friederike Henriette Christiane Eugenie John] 1825–1887）　テューリンゲン州の小都市アルンシュタット（Arnstadt）に生まれ没した女流作家のペンネーム。生家の窮乏の中、アルンシュタットの城館の伯爵夫人に才能を見出されて教育を受け、舞台俳優となったが難聴を患って伯爵夫人の侍女を務めた。1863年に伯爵家の家計の悪化で解雇され、作家を目指した。短編を手掛けた後、1865年に最初の長編小説『金髪のエルゼ』を雑誌『庭のあずまや』に聯載し、一躍、人気作家となった。この作品の聯載の直後の1866年に同誌の発行部数は14万部に急増した。なお雑誌小説としてははじめて一流のイラストレーターと組み合わせた効果も大きかったとされる。以後もベストセラーが多く、同時代の青春小説作家オッティーリエ・ヴィルダームート（Ottilie Wildermuth［旧姓 Rooschütz] 1817–77）、マリー・ナトゥージウス（Marie Nathusius［旧姓 Scheele] 1817–57）と共に、最も成功した女流大衆小説作家であった。**『金髪のエルゼ』**（*Goldelse*）は1848年から始まるという設定。シレジアの小貴族の娘と将来を目された下士官が結婚するが、下士官は1848年革命に関わって未来を断たれ、夫婦は放浪し森の中の廃城で暮らし、二人の間に生まれた子供のうちの娘エリーザベトが《金髪のエルゼ》と呼ばれる。下士官は失意のうちに亡くなり、エルゼも辛苦の中で成長する。彼女の愛をめぐって数人の男たちが争い、また彼女が貴族の血筋で財産相続権を持つことを狙って暗躍する者もあらわれる。エリーザベトの恋と結婚に嫉妬する女性もいるが、紆余曲折の後に愛する男との結婚に至る。また失意のうちにアメリカへ渡る者も描かれる。

p. 151 **『報知週覧』**（*Fliegende Blätter*）　1844年に創刊され、1944年までミュンヒェンの出版社（Braun& Schneder）から刊行されていた週刊誌。初期には毎号8頁であった。総じて諧謔調であり、またイラストが売り物でカリカチュアが掲載されたほか、詩や読み物も盛り込まれた。ヴィルヘルム・ブッシュなど多くのイラストレーターがこの雑誌から巣立った。

p. 154 **ヴェルナー・ゾムバルト**（Werner Sombart 1863–1941）　エルムスレーベン（Ermsleben in Falkenstein

/ Harz *ST*）に生まれ、ベルリンに没した経済学者・社会学者。ベルリン大学でグスタフ・フォン・シュモラーやアードルフ・ヴァーグナーについて経済学・国家学などを学び、ブレスラウ大学、ベルリン商科大学を経て、1917年にベルリン大学教授として経済学を担当した。主著に『近代資本主義』や『これからの資本主義』などがあり、主要著作の多くは邦訳されている。

p. 156 **会社員**（Angestellte/ -er 専門職能者・サラリーマン）就業形態のカテゴリーとして、アンゲシュテルテ（ター）とアルバイター（Arbeiter）がある。今日でも、前者は専門的職能・知見を提供する対価として給与を得るが、後者は他者で代替可能な一般的な労働力という受けとめ方がなされることが多い。ホワイトカラーとブルーカラーと訳されることもある。

p. 156 **ゲマインシャフト・イデオロギー**（Gemeinschaftsideologie）《ゲマインシャフト》は古くからの語であるが、フェルディナント・テンニェス（Ferdinand Tönnies 1855–1936）の『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』（*Gemeinschaft und Gesellschaft*. 1887）によって対比概念として措定された。当初反響は小さかったが、20世紀が進むに連れて時代思潮に合って社会を有機体と見る見解の拠り所となり、最後はナチズムによって濫用された。このため第二次世界大戦後はナチズム批判の脈絡でゲマインシャフト批判がおきた。テーオドル・W・アドルノの批判（1944年）と、ルネ・ケーニヒによる《ゲマインシャフトとゲゼルシャフト》の二項対比が空疎であるとの論説（1955年）が次第に浸透し、1960年代末には批判な見方が大勢となった。民俗学では戦後もしばらくは《共同体》を指す語としてゲマインシャフトは用いられており、バウジンガーも1950年代には語法面でその流れから脱していなかったが、50年代末から批判の見解を吸収し、1960年代後半にはゲマインシャフト概念のイデオロギー性を批判する論壇の一角を占めるようになった。

p. 157 **テーオドル・ガイガー**（Theodor Julius Geiger 1891–1952）　ミュンヒェンに生まれたユダヤ人の法社会学者。ミュンヒェン大学とヴュルツブルク大学で学び、第一次世界大戦の兵役中の1918年に学位を得た。戦後、ミュンヒェンの統計局の学術員となり、また SPD に入党した。1924年からブラウンシュヴァイク工科大学で社会学を教え、1929年に正教授となった。学部長として同大学の改革にたずさわり、また自由都市ブラウンシュヴァイクの内務相でナチスのディートリヒ・クラーゲスが、同大学に《有機的社会理論と政治》（Organische Gesellschaftslehre und Politik）の教授ポストを新設してヒトラーに委ねる政策を強行するのと闘った。1932年に『ドイツ民衆の社会的層序』（*Die soziale Schichtung des deutschen Volkes*）を上梓してヴァイマル時代後期の社会諸層の解明を試み、そこでは選挙行動の研究が組み込まれた。また《血のロマンのおぞましくもプリミティヴな自然主義》を精神への脅威として難じた。ナチ政権の成立を見てデンマークへ亡命し、コペンハーゲン大学の研究所の所属を経て、デンマーク最初の社会学の教授として1938年から1940年までオーフス（Aarhus）大学で教えた。ドイツのデンマーク占領に直面して1943年にスウェーデンへ亡命し、戦後1945年にオーフスへ戻った。1951–52年にカナダのトロント大学客員教授となり、帰途の船上で没した。

p. 157 **ヴィル=エーリヒ・ポイカート**（Will-Erich Peuckert 1895–1969）　プロセン王国時代の低地シレジアのテッペンドルフ（Töppendorf 現ポ Zagrodno / Powiat Złotoryjski）に生まれ、ダルムシュタット近郊ミュールタール（Mühltal Lk. Darmstadt-Dieburg *HE*）に没した民俗学者。ブレスラウ大学で歴史学・ゲルマン・民俗学・民族学を学び、プロテスタント教会系の神秘思想家アーブラハム・フォン・フランケンベルク（Abraham Graf von Franckenberg 1593–1652）の研究で1927年に学位を、1932年に「12シラブルの予言」（*Zwölf Sibylle Weissagungen*）の研究で教授資格を得た。青年期は文藝に情熱を注ぎ、小説や戯曲を書き、アンドレーアス・ホーファーを取り上げた作品もある。同時に社会民主党左派と親近で、**『プロレタリアートの民俗学 第1巻』**（*Volkskunde des Proletariats. I. Aufgang der proletarischen Kultur*. Frankfurt 1931）を上梓した。1935年にナチスによって研究者歴抹消の措置を受け、以後は『ドイツ民俗事典』の項目執筆などで細々と生計を立てつつ、チャンスを見て研究成果を世に出した。戦後はその姿勢と民俗学の幅広い分野での知見を評価されて、1946年から1959年の定年までゲッティンゲン大学教授となり、戦後のドイツ民俗学の表舞台に立った。民間俗信などに厚かったが、青年期から見せていた魔術的な要素について研究を拡大するなかで、テーマと方法論の整合性に破綻をきたした面もある。

p. 157 **民のいとなみ**（Volksleben）　19世紀後半に民俗学的な関心が広まるなか、民俗学の対象を概括的に言いあらわす語として定着した。同じく合言葉となった Sitt und Brauch すなわち（民俗）儀礼と（民俗）行事などが想定されている。しかし基礎語の Volk の概念が明確ではないため合言葉に終始したが、ま

た合言葉としては20世紀前半までのドイツ民俗学の結節点であった。

p. 157 **エマーヌエール・ザックス**（Emanuel Sax 1857–96）　テューリンゲン地方の民藝では指標的な著作が知られるが、経歴は明らかにし得なかった。

p. 158 **ヴォルフガング・シュタイニッツ**（Wolfgang Steinitz 1905–67）　ブレスラウに生まれ、ベルリンに没したゲルマニスト・民俗学者。父親は富裕な弁護士で、両親共にユダヤ人であったが、ユダヤ社会とは距離を置いていた。ブレスラウ大学とベルリン大学でフィン=ウゴル語研究とエスノロジーにたずさわり、またヴァイオリンを手放さなかった。1926年にドイツ共産党に入党し、フィンランド、エストニア、ハンガリーの研究機関に属しつつ、スターリン路線に忠実な職業革命家をめざした。ナチ政権の成立を見て、ユダヤ人ゆえの危険を避けてモスクワに居を移した。戦後は東ドイツの政権政党、社会主義統一党（SED）の中央委員、また東ドイツ科学アカデミーの副会長を務めたが、国家評議会議長（＝国家元首）ヴァルター・ウルブリヒト（Walter Ernst Paul Ulbricht 1893–1973）によって失脚させられた。主著に『過去600年間のドイツ民謡に探るデモクラシーの特徴』がある。

p. 158 **オスカー・シャーデ**（Oskar Schade 1826–1906）　エルフルトに生まれ、ケーニヒスベルクに没したゲルマニスト。ハレ大学とベルリン大学でプロテスタント神学と文献学を学び、「死せるシオンの歌」の文献学的研究によって1849年にハレ大学で学位を得た。グリム兄弟とカール・ラッハマンの弟子で、1860年にハレ大学において教授資格を得た（古独語の文献学）。早くから作家活動を行なっており、1950年代にはヴァイマルにおいてホフマン・フォン・ファラースレーベンと共に『ヴァイマル年報』6冊を編んだ。1863年にケーニヒスベルク大学の国語国文学の教授となった。

p. 159 **五月の祭儀**（Maifeier）　ナチスは政権を獲得した1933年に早くも5月1日を《国民の労働の日》（Tag der nationalen Arbeit）とし、首都ベルリンにおいてヒンデンブルク大統領の臨席の下で盛儀を企劃したのをはじめ、ドイツ全土で祭り行事を実行してナショナリズム発揚を図った。

p. 159 **民族共同体**（Volksgemeinschaft）　ナチスが呼号したスローガンで、ゲマインシャフト概念の歪曲であると共に、その必然的に行き着いた思念という面もある。アドルノはこの概念を基礎語《ゲマインシャフト》の延長線上に位置づけて批判し、バウジンガーもアドルノを参照しつつ独自に批判的見解を呈示した。

p. 161 **ロタール・イーレ**（Lothar Irle 1905–74）　ヴェストファーレン地方のニーダーゼッツェン（Niedersetzen：1975年からジーゲン市域）に生まれ、ジーゲン（Siegen）に没した郷土誌家。マールブルク大学とフランクフルト（M）大学でゲルマニスティク・歴史学・民俗学を学んだ。すでに1923年には、ナチ党が禁止されていた時期の代替組織「フェルキッシュ＝社会主義ブロック」（Völkisch-sozialer Block）のメンバーとなるなどフェルキッシュ思想の活動家であった。ナチスの日曜学校の教員を経て、1934年に学位を得てドルトムントの国民学校教員養成大学の講師として民俗学を担当した。1938年からは南ヴェストファーレン・ナチス教員同盟のリーダー、また反ユダヤ主義の活動家であった。そのため戦後は脱ナチス措置を受け、以後も正規の職に就くことなく、生地を含むジーガーラント（Siegerland）の郷土史家として活動した。生涯では数十点の著作を刊行し、郷土研究の成果として貴重であるが、反面、そのフェルキッシュ思想の洗い直しが課題とされる。

p. 161 **ディーツ=リューディガー・モーザー**（Diez-Rüdiger Moser 1939–2010）　ベルリンに生まれ、ミュンヒェンに没した民俗学者・文藝史家・音楽研究家。両親は音楽家（母親はシューマン夫妻の曾孫）、ゲルマニスティク・中世文学・藝術史をベルリン、キール、ザールブリュッケンの諸大学で学び、1967年にゲッティンゲン大学で音楽研究によって学位を得た。1978年にフライブルク大学（i.Br.）において民俗学で教授資格を得、諸大学を経て、1981年に同大学の民俗学の教授となり、1984年から2004年までミュンヒェン大学教授として文藝史を担当した。カトリック教会系の年中行事をもレパートリーとした。

p. 161 **カール・イルク**（Karl Ilg 1913–2000）　墺フォアアールベルク州ドルンビルン（Dornbirn）に生まれ、インスブルックに没した民俗学者。インスブルック大学で歴史学と地理学を学び、1937年にマリア・テレジア=ヨーゼフ2世治下のフォアアールベルクの行政改革の研究で学位を得た。フライブルク大学（i.Br.）の助手を経て、1947年にインスブルック大学においてフォアアールベルクの移牧者（Walser）の研究で教授資格を得た。1949年の同大学の民俗学研究所長に就き、1961年に正教授となり1985年に定年退官となった。

p. 161 **ルール占領**（Ruhrkrise 1923）　第一次政界大戦の賠償としてドイツがフランスとベルギーに供給するとしていた石炭の引き渡しが滞り、それをドイツの不誠実と見たフランスとベルギーは1923年1月から10月までルール地方を占領し、地元の労働者を追放して自国労働者に入れ替える政策をとった。それに対してイギリスは当初からドイツの不払いは不可抗力によるものとして占領に反対していた。ドイツではシュトレーゼマン内閣がルール地方の労働者に受動的抵抗を呼びかけた。イギリスの主導とアメリカの支援の下、各国の協議により調停が成立し、占領は解除された。

p. 161 **ハンス=ユルゲン・トイテベルク**（Hans-Jürgen Teuteberg 1929–2015）　デュッセルドルフに生まれ、ミュンスター（Münster i.W.）に没した歴史学者。ゲッティンゲン大学で近代史・国民経済学・法制史・社会学を学び、1956年に学位を得た。ハムブルク大学の社会経済史の助手、次いで講師を経て、1974年にミュンスター大学（i.W.）近代経済史・社会史の正教授となり、1995年に定年退官となった。産業史をレパートリーとし、経営における労使協議組織の展開に注目した。

［訳者解説］

本篇はドイツの民俗学者ヘルマン・バウジンガー（1926–2021）が1973年に発表した論考の全訳である。タイトルは直訳では「市民化 —— 解釈類型の帰結」であるが、やや説明風のタイトルとした。書誌データは以下である。

Hermann Bausinger, *Verbürgerlichung. Folgen eines Interpretaments*. In: Kultureller Wandel im 19. Jahrhundert. Verhandlungen des 18. Deutschen Volkskunde-Kongresses in Trier von 13. bis 18. September 1971. Hrsg. von Günter Wiegelmann, Schriftleitung Diemar Sauermann. Göttingen [Vandenhoeck & Ruprecht] 1973, S. 24–49.

バウジンガーについては、著作の翻訳の他、本誌でも何度か小論を翻訳紹介しており、解説もほどこしたため、略歴や事跡は省略する。書誌データが示すように、もとは1971年にトリーアで開催された「ドイツ民俗学会」の大会における報告であった。大会は隔年で、その年のテーマは「19世紀の文化の変容」であった。2年後に報告書が刊行され、そのさい注記などが補足されて論文の体裁に整えられた。

論説の中身だが、今回は、特に解説を加えるのを控えたい。本文の記述は具体的であり、また人名や事項については、日本で知られている度合いに応じて訳注に精粗を（つまり日本であまり知られていないものほど詳しく）つけたからである。代わりに、今回はバウジンガーの論説の形式的な特徴にふれようと思う。と言うのは、この論者の著作と小論をある程度紹介しているが、日本での受容（と言うより理解）が今一つなのである。最大の要因は日本民俗学とドイツ民俗学の距離にあるが、その根本的な原因はともかく、幾らかでも興味を寄せる人たちのために、読み方について案内をしてみたい。読み方のコツ（の一つ）と言ってもよい。

バウジンガーの記述の特徴と訳者の工夫 —— 解説に代えて

本篇は元は学会での発表であったことからも、そう長いものではない。もっとも日本の学会と違って日程には余裕があり、また発表者もテーマに合わせて絞られていた。あるいは、当時のドイツ民俗学会は規模が小さかったと言うべきかもしれない。昨今は、大勢の発表希望者を幾つかのセッションに分けている。ともあれ、その時の大会の日程は6日間で、初日と最終日はレセプションや見学ツアーなどがあり、中4日が発表に充てられた。発表者は19人、開会の挨拶を含めれば20人であった。そしていずれの発表にもディスカッションの時間がもうけられ、質疑は座長によって記録された。が、そうではあれ長いとは言えず、そのため本篇の原文には区切りがほどこされていない。しかし中身はかなり盛沢山である。日本の特に民俗学には馴染みの薄いことがらを含むためにそう見えるということでもあるが、それを考慮して、訳者の判断で幾つかに区切って小見出しを付けた。

（冒頭の主題提示）

そのさい冒頭部分を一頁という短さにも拘わらず「はじめに」として区切ったのは、それが主題提示であることを明示したかったのである。先ずは、その一頁の後半、すなわち概念的な説明の方に注目したい。本篇が口頭で発表された1970年代初めと言えば、いわゆる先進国では、第二次世界大戦後の経済発展の成果が比較的ひろく行き渡った時代であった。その状況を踏まえて、《平準化された中流社会》、《均一社会》、《豊かな社会》、《過剰社会》などが流行語となったことが話題にされる。ちなみに、似たような状況は同時期の日本でも見られ、国民の7割以上が自分を中流と感じているとの統計データもあって、《一億総中流》がはやり言葉となったものである。それから半世紀を経た今日、そうした認識は遠い昔の観がある。しかし時代がそれ以前に逆戻りしたと考えるのは、それまた間違いであろう。

《均一》や《平準化した》といった表現の当否はともかく、資産や収入や現実の生活条件の大きな差異を措いて、市民という存在形式なら概括的には共通性の認識があることは否めない。つまり基本的には《市民化》が実現されているとの受けとめ方で、だからこそ亀裂が起きているのが現今であろう。これを言うのは、市民化は均一であることを意味するわけではないからである。バウジンガーは、そこを問い直したのである。市民化が平準化・均一化として捉えがちな諸々の理論仮説である。しかし《ここで問題にするのは、アクチュアルな社会像ではなく、そうした社会像の歴史的次元である》として、市民化の過程、つまり歴史を問うことが課題であるとされる。これには、政治・経済・文化をはじめさまざまな分野で現代の骨格が形成されるのは19世紀で、その時期の構造変化をどう解するかは現代との取り組みの土台の意味をもつというのがバウジンガーの問題意識だったからである。もっとも、それは大枠としては多くの識者に共通した認識でもある。従っ

て、そうした歴史の動きについては《諸々の理論仮説》が早くから力を揮ってきた。バウジンガーはそれを問題にしたのであり、独自の方法論でもあった。すなわち《解釈可能性と実際の解釈が非常に早くから解釈類型へと固定したこと、すなわち書割り的な（[訳注] 紋切り型の）観念となったこと、さらにその書割り観念が発展に影響した（今もしている）》ことを洗い直す必要がある、と言う。つまり均一な市民性と、それに向かって進んできたという理解の型である。

なおそこで《解釈類型》(Interpretament）という用語が使われたのは時事的な面がある。本来、かなり難語であるが、ちょうど社会学における社会システム理論が話題になっていた時期で、その用語として論壇でよく耳にされたのである。したがって、昨今はやりの言葉で言えば《解釈類型》になるだろう、というニュアンスがあり、少なくとも大会の参加者には見当がつきやすかった。またその語をバウジンガーがもちいたのは、市民化過程をめぐる通念、すなわち一種の心理的機制を問題にしようとしたからだった。通念を一概に退けるのではなく、通念が果たした（果たしている）役割とそれが必要とされた状況と経緯を理解することを含んだ分析がもとめられる、という考え方である。かくしてヴィルヘルム・ハインリヒ・リールの《第四身分》を出発点に、次いで市民と労働者を対立的ないしは対比的に捉える見方の洗い直しへと進んでゆく。

少し先まで進んだ説明となったが、ともあれ主題提示が最初に来るのはバウジンガーの記述の特色である。何を論じるかを始めに明記するのは余りにもまっとうで、ことさら記述方法と断るほどではないが、（訳者の経験からは）これが日本ではなかなか理解されない。主題提示を読み飛ばしてしまい、結局、要領を得ないことが多いようである。それには、主題呈示がたいてい一工夫凝らされていることも関係している。つまり、ユーモアや諧謔の効いたエピソードであったり、詩人・作家の詩歌やエッセイの一節であったり、時事的な話題であったりで、しかも改めて注意するとシンボリックなのである。冒頭の一頁の前半は、それにあたる。むろんドイツ人の聴衆や読者にはただちに理解でき、それによってバウジンガーの理論に引き込まれることになる。したがって巧みな弁論術なのだが、それが日本ではピンと来ないことが多いらしい。本来、そこで関心を掻き立てられ、引き寄せられるはずの導入部が、日本ではその機能を果たさないのである。しかも、その導入部は論説の起点でもあり、続く行論も、起点と照応した相似形を呈して拡大し、多彩に論じられた後、ふたたび導入部に言及して締めくくりになる。論説全体がそうした紡錘形をしているのがバウジンガーの著作・小論を通したスタイルである。

今の場合で言えば、民俗学では労働者（アルバイター）がほとんど取り上げられてこなかったことが指摘される。民衆を指す語は、民俗学では《フォルク（民)》が一般的だったのである。そこに、《世界精神》なる言葉がウィット的に入り込む。ヘーゲルの用語として有名だが、普通に使われるまでになっており、歴史の法則くらいの意味である。つま

り、民俗学が労働者を正面から取り上げないでいるうちに、歴史の歩みは、労働者をことさら取り上げなくてもよい段階に到達した、と言えなくもない、とアイロニーを効かせつつテーマが暗示される。さらに外国人出稼ぎ労働者をめぐるアネクドートが重なる。そうした工夫で聴衆や読者をひきつけた上で、改めてテーマが概念的に表現される。これは先に解説した。

そして最後は、《自己充足的予言》に言及される。日本でも知られているアメリカの社会学者ロバート・K・マートンの理論で、現代の古典と言ってもよいため、分かりやすいヒントである。しかし、補足すると、バウジンガーはその独自の民俗研究の方法をマートンから得たわけではない。自己の方法を確立させた後、それを説明するために、多少とも重なるような先行例をもとめ、特に社会学の分野に目を走らせる中でマートンに気づいたのだった。事実、マートンの理論はメディア論であり、それに対してバウジンガーの見方は歴史的に大きな射程であるのが特徴で、ただちに重なるわけではない。ただ、これを説明に入れると、聞く（読む）方は見当をつけやすい。そのため、ちょうど本篇の時期の1970年頃からバウジンガーはマートンに言及するようになったようである。つまり、興味がわきそうなエピソードを挙げ、よく知られている先行する知見にもふれるなど、親しみやすくするための工夫である。―― とまれ、こうした導入部の工夫を押さえるなら、容易に読み進むことができるだろう。他には特に問題はないはずだが、もう一つ二つ補足をしておこう。

（社会主義運動の取り上げ方）

19世紀の労働者が話題であるため、社会主義運動に言及される割合が大きくなる。が、本篇はそこに重点があるわけではない。なお社会主義運動が取り上げられる場合は、通常、イデオロギーの流れと運動組織の推移が重要視される。が、ここでのテーマは文化である。それゆえイデオロギーと運動組織に関する知見は必要だが、そこに基準を置くと、それらを斜めに突っ切るような脈絡を本篇は浮き上がらせる。ヴィルヘルム・ハインリヒ・リールの見解や、初期の家庭雑誌への目配りや、労働者作家の作品からの引用などは、社会主義運動史の尺度では収まりにくい角度からの考察である。ヴェルナー・ゾムバルトのプロレタリアート論への着目もあらためて一考を促すだろう。それらを通じて、労働者文化が取り上げられるのだが、それは、そもそも市民的文化に対する労働者文化というカテゴリーが成り立つのかどうか、という設問を含んでいる。

（労働者文化とクラブ・組合について）

これと密接なのが、クラブ・組合への着目である。ドイツ語ではフェルアイン（Verein）、一般にはアソシエーション（association）と呼ばれる自由な個人による結社形態で、近代

社会の産物である。前史はあるが、19世紀前半に最初の興隆期を迎え、それを《フェルアイン（アソシエーション）の時代》と呼んだのは歴史学者トーマス・ニッパーダイであった（1972年）。バウジンガーはすでに1950年代末からこの結集形態に注目しており、たとえば民俗行事の担い手の団体も実際にはフェルアインであることを民俗学は組み込むべきと説いていた。むろん伝統文物の保存団体などは多種多様なフェルアインのごく一部で、民衆動向では、時代相応のモチヴェーションによるものが大きな意味をもった。ドイツ特有の体育である体操（トゥルン／トゥルネン）の団体や、18世紀末から飛躍的に高まった歌曲クラブ（主に合唱団）である。他にも音楽・学術・農業改良・慈善・監獄改善などありとあらゆるモチヴェーションによるフェルアインが成立し、それが今日まで延びている。学校児童が放課後にスポーツの実修をするのも学校ではなく、地域のスポーツ団体（フェルアイン）においてである。よく言われることだが、業界団体からホビーの集まりまで、この種類の結集は今日の社会生活のありふれた様相となっている。このフェルアインが発達したのが19世紀を通じてであった。基本は市民の団体であったが、やがて労働者層が独自にフェルアインを結成するようになった。本篇でも、《フェルアイン（アソシエーション／クラブ・組合）は、19世紀の労働者層にとって中心的な意義をもった。実に、労働者文化の全てが、労働者フェルアイン文化から導き出されたと言ってもよいくらいである》（p. 140）という件りがある。そこで検討されるのは、労働者の文化的結集が、基本的には市民的な性格をもっていたことであった。しかし、やがて市民と労働者のどちらの概念も、拠って立つ土台が変化していった。その辺りは本篇では取り上げられてはいないが、市民は19世紀前半のようなブルジョワジーではなくなり、労働者層もプロレタリアートではなくなった。19世紀が終わる頃には会社員（Angestellte/er アンゲシュテルテ［ター］：専門職能者・サラリーマン）という勤務形式の意義が大きくなり、マルクス主義の階級概念もその有効性を問われることになった。土台が《市民的中流社会と言うより、大衆社会として把捉できる性格のもの》（S. 33）へと変わり、そうした中で、市民・労働者ともに、文化について既存の型を追うのではなく、新たな状況に合う形態を探り出していった。ただし、これを大衆文化と呼ぶのは、これまた留保を要する。やがて（正に今日がそうだが）高度文化と大衆文化という二分法は成り立たなくなるからである。その辺りについては、バウジンガーの別の論説で扱われるが、そうした構図に向けて動きが始まった時期について、主要な幾つかの脈絡をときほぐしたのが本篇であった。

［付記］本篇の邦訳にあたっては「ドイツ民俗学会」から版権を含めて好意的な配慮を得たことを明記する。

Sep. 2023　S. K.